上手に伝えられなくて

作　藤田　久雄

登場人物

広居こずえ・・・九州から上京して大学卒業後、一つ年上の彼が起業した福祉施設で働く。現在は発達障がい者の従業員と小さな喫茶店を営むが、経営難のため借金がある。

生田つよし・・・発達障がい者でこずえの経営する喫茶店に住み込みで働いている。元はこずえの働いていた福祉施設の利用者だったが、母親の再婚をきっかけに不遇が重なり一人社会に投げ出され一度はホームレスにもなっていた。

山本しんや・・・子供の頃からおじいちゃん子だったが、その大好きなおじいちゃんが認知症でボケてしまう。その認知症のおじいちゃんを巡って家族が揉めてしまう。その事をきっかけに福祉施設を起業する。

広居ようこ・・・こずえの母。九州で工務店を営んでいた夫が他界。店もたたんで借金が残ってしまう。借金返済のためスナックを始める。こずえには社長の彼との結婚を望んでいる。

村岡りゅうじ・・強面の風貌だが常識人。弁護士に雇われ取り立てなどを代行する民間企業の社長。

安田やすお・・・村岡の会社で働いている。村岡を兄貴といってしたっている。

上沼えみ・・・こずえと大学時代の同級生。アナウンサーを目指していたが、夢破れ今は得意のしゃべりを活かして結婚式などの司会業をやっている。

石原さとみ・・・生田と同じ施設の利用者。生田に想いを寄せている。施設では歌を歌って皆を盛り上げていた。今でも生田の働く喫茶店で歌の練習をするために出向く。

五十嵐よしき・・同じ施設の利用者で石原さとみに想いを寄せている。

服部くにこ・・・福祉施設の職員でこずえと一緒に働いていた。石原と五十嵐に付き添って喫茶店にも来る。

岩崎せいと・・・喫茶店の常連客。

警官・・・・・・こずえの喫茶店の近所にある交番のおまわりさん。

男・・・・・・少し酔っぱらっている通行人。

女・・・・・・少し酔っぱらっている通行人。

その他・・・・・通行人。

プロローグ

陽は沈み寒さはより深まってくる。
遠くから賑やかな音楽が聞こえてくる。
クリスマスが近いのだろう。

溶明。

都会の片隅の路地裏、ゴミが散らかっており人通りは少ない。時折そこを通る人は肩をすくめながら足早に通り過ぎていく。
ホームレスが一人、缶かん袋をぶら下げてのろのろと歩いてはゴミを漁る。
そこへご機嫌なカップルが通りかかる。

女　ちょっと酔っ払っちゃったかな。
男　おい、だいじょうぶかぁ？
女　うん、だいじょうぶだぁ～（よろける）おっとっと。
男　（女を支える）ほらっ、だいじょうぶだぁ～、じゃねーよ仕方ねぇなあ。
女　えへへ。

ホームレスが漁っているゴミの一部が、男の方へ飛んでくる。

男　うわっ、汚ったねぇっ。
女　あはは、くっさぁーい。
男　（舌打ちをしてホームレスに）おいっ。

ホームレスはゴミを漁っていて気づかない

男　おいっ、お前ぇだよ、ルンペンっ。
ホームレス　・・・。
女　ちょっと、もういいじゃん、ほっときなよ。（男の腕を引く）
男　（女の制止を無視して）おいルンペン聞いてんのかっ？　大体テメェーらルンペンは甘えてんだよっ！　この人間様の社会に順応できねぇくせに、それでもこの社会にしがみつきやがって、その根性自体がルンペンなんだよっ。お前ら生きる意味あんのか、生きる資格があんのかっ・・・、ああぁ？

ホームレスは立ち上がりその場を去ろうとする。
男はホームレスを蹴飛ばす。
ホームレスはゴミに埋もれる。

男　このっ社会のゴミがっ、口もろくに聞けねぇのかっ。
女　ちょっと、もういいでしょ、行こ。
男　あーあ、すっかり酔いが覚めちまった。
女　じゃあまた呑み直しましょう、わたしん家で。
男　お、いいねぇ。
女　でもまずシャワー浴びてね、ゴミの臭いがするから。
男　うそっ、マジで？

女は笑いながら行く、男も後を追っていく。
ホームレスはゴミに埋もれたまま動かない。
そこへ広居こずえが通りかかるがホームレスには気づいていない。

こずえ　・・・。
ホームレス　う、んーん。（呻き声）
こずえ　えっ、びっくりした、ゴミだと思ったら、人がいたのね・・・。こんな寒いところで鼾かいて寝てる。（行こうとする）
ホームレス　ぐぅ、ぐるしぃ。
こずえ　（振り返る）え？
ホームレス　ぐるしい、むねが、胸が、痛い、苦じぃぃ・・・。
こずえ　あのう、大丈夫ですかぁ。
ホームレス　ぐるしい・・・。
こずえ　あのぉ・・・（恐る恐る近寄り）え、うそっ、いっ君！？
ホームレス　むねがぁぁ・・・
こずえ　え、何でこんな処で。

ホームレスは呼吸が荒くなっていく。

こずえ　ちょっ、ちょっと待って、ちょっと待っててねいっ君、すぐ助けを呼ぶから。（通行人に助けを求める）あ、あのすみません。
通行人　はい？
こずえ　た、助けてくださいっ。
通行人　どうしました？
こずえ　（ホームレスを指差して）苦しんでるんですっ。
通行人　（ホームレスに一瞥くれて）あ、自分はちょっと・・・。

通行人は去っていく。
こずえは、何人かに声をかけるが誰もがホームレスと認識したとたんに去って行く。
こずえは、ポケットのスマホに気が付き電話をかける。
そして、ゆっくりと暗転する中、賑やかな音楽は高まり、
その中に微かに救急車の音が混じりながら・・・溶暗。

1場

春先ごろ、開店前の喫茶店。
店内は現代的な内装ではなく、どちらかと言えば古くて、良く言えばレトロ風。とは言えアンティークな物などは無く、殺風景な店内。

舞台セットは・・・客席に対して全体が斜になっている。
上手側にはカウンターテーブルがあり、その奥には事務所への入口があり、手前にはトイレへの入口がある。
下手奥には外への出入口がある。下手前には桜の木があり一部の枝が壁を突き破り店内へ入ってきている。
（木のすぐ横、舞台正面側には窓がある想定）
その他店には小さなテーブルが３卓（又は２卓）ほどあり、それぞれに椅子が２脚ずつ向い合せにセットしてある。・・・トイレ近くの片隅には観葉植物が置いてある。

奥から何やら生田の歌う声が聞こえてくる。

事務所から生田つよし（発達障がい者）が現れ、手には布巾を持っている。
桜の木に近づいて。

生田　はい、おはようございます。もうすぐお昼ですけどお客さんには元気よく、いらっしゃいませっ！　と言いましょう、はい。

生田は開店準備を始める。
テーブルの前に立ち。

生田　よろしくお願いします。（テーブルを拭き）はいキレイになりました。

生田はすべてのテーブルに挨拶をし終わると、ウエストポーチに着けている腕時計を見てそわそわしだす。
そして、飛び跳ねる。
一息ついたら布巾を片づけようとカウンターの方へ向かう。

ドア鈴が鳴り、こずえが入ってくる。
生田はすかさず飛び出して。

生田　いらっしゃいませっ！
こずえ　いっ君おはよう。ちゃんと眠れた？（以下、いっ君）
いっ君　おはようございます、寝ました。こずえさんこずえさん、何時何分、何曜日？
こずえ　ごめんねいっ君、少し遅くなっちゃった。今日は、金曜日です。
いっ君　今日は金曜日です。
こずえ　そう、金曜日。金曜日は何の日？
いっ君　金曜日は何の日ですかこずえさん。・・・はい。
こずえ　はい、いっ君。
いっ君　今日は金曜日です。金曜日は何の日ですか？　金曜日は金曜日の日です。金曜日の次は土曜日です。土曜日の次は日曜日です。その次は月曜日でその次は火曜日でその次は水曜日でその次は木曜日でその次は・・・
こずえ　金曜日はゴミ出しの日でしょう。
いっ君　はい、金曜日はゴミ出しの日でしょう。
こずえ　ちゃんと今朝ゴミ出ししてくれた？
いっ君　はい、忘れないように昨日、こずえさんがゴミ出しの用意をしてくれましたので、おかげさまで。
こずえ　ありがとう、いっ君。集積所は目と鼻の先だから流石に出来るわよね。（事務所へ）
いっ君　（がっかりして）・・・さすがに出来ます、もういい大人ですので。そのくらいの事は子供にだって出来ますから。こずえさんの心配性には困った困った。

外からゴミ収集車の音楽が聞こえてくる。
おじさん達が何やらブツブツ言っている。

こずえ　（オフで）ごくろうさまです。あっ、すみません、それうちので

す。はい、すみません。

ゴミ収集車の音楽が遠ざかっていく。

いっ君　（ため息）やれやれ。

こずえ戻ってきて。

こずえ　もう、いやねぇ、これで何回目よぉ。何でうちのだけピンポイントに狙うのかしら。

いっ君　ねらうのかしら。

こずえ　カラスも朝から図太い神経してるわね。いっ君が朝ごみ出しした時もそこら辺にカラスいた？

いっ君　わかりません、朝は外に出ていませんので。

こずえ　え、だってゴミ出ししたでしょう？

いっ君　しました。

こずえ　その時よ。

いっ君　カラスは黒いので、夜はどこにカラスがいるかわかりません。

こずえ　夜の話じゃなくて、今朝よ。ゴミ出ししたでしょ朝？

いっ君　朝はゴミ出ししていませんので、僕にはカラスの事はわかりませんので、カラスの事はカラスに聞いてください、おわり。

こずえ　・・・ちょっといっ君。

いっ君　（そっぽを向いたまま）はい何ですか、こずえさん。

こずえ　ゴミはいつ出したの？　・・・人と話す時はこっちを向く。（生田を対面させる）

いっ君　（目線は宙を向いたまま）こずえさんが昨日の帰りに、ゴミ出してくださいと言っていたので忘れないうちに出しました。

こずえ　だからいつ？　（両手で生田の顔をはさみ）こっちを向く。

いっ君　こずえさんが帰ったあと。

こずえ　と言うことは昨日の夜にゴミ出したのね。

いっ君　この前は忘れてしまったので、朝こずえさんがガッカリしていたので、こずえさんのガッカリした顔を見るのは、僕は好きではないので、ゴミを出しました。

こずえ　ゴミを出したのはいいんだけど、夜じゃなくて朝出してって言ったよね。

いっ君　はい、言いました。

こずえ　（ため息）夜ゴミを出したらダメなの。野良猫とかカラスがゴミ袋を漁り散らかして、いろんな人に迷惑がかかるでしょう。

いっ君　迷惑千万。

こずえ　そう、迷惑千万。だから夜にゴミを出してはダメ、わかった？

いっ君　ゴミを出してはダメ。
こずえ　・・・ゴミは、出してもいいのよ。
いっ君　ゴミは出してもいい。
こずえ　夜は、
いっ君　ゴミは出してもいい。
こずえ　ダメ。
いっ君　ダメ。
こずえ　朝、ゴミを出し
いっ君　出してはダメ。
こずえ　いい。
いっ君　いい、ゴミは出してもいい。ゴミは出したらダメ。（繰り返す）
こずえ　・・・もう、朝から疲れるわねぇ。ちょっといっ君、裏に居るから、何かあったら呼んでね。（事務所へ）
いっ君　いい、ダメ、いい、ダメ、いい、ダメ、いい、ダメ、（植物の所へ行き）やれやれ、はっきりとしないんだからこずえさんは、女心と何とやらですか。

カウンターにある電話が鳴る。
生田は電話には出ず、おろおろとして耳を塞ぐ。

こずえ　（オフで）ああー、はいはい、ちょっと待ってねー。
いっ君　はいはい、ちょっとだけ待ちます。

こずえ入ってくる。

こずえ　朝から誰だろう？
いっ君　生田つよしですっ。
こずえ　はい、もしもし、「喫茶、あなたの止まり木」です。
いっ君　・・・。
こずえ　もしもし・・・、あれ、切れちゃった。
いっ君　どちら様ですか？
こずえ　間違い電話みたい、朝から嫌ね。（事務所の方へ）あ、いっ君、今日の音楽かけといて。
いっ君　はい。・・・今日は金曜日です。金曜日は何の曲ですか？　金曜日は、金曜日の曲です。金曜日の曲は「ピアノクラッシク、ディスク６、ノスタルジックピアノ、７０分２３秒です。」はい。

生田はＣＤをセットする。
曲が流れる。

いっ君　モーツァルト、メヌエット、へ長調。

ひと間あって。
ドア鈴が鳴り、安田やすお、が入ってくる。
安田は、スカジャンを着ていて、鋭い目つきで辺りを見回している。
生田は、安田に駆け寄り、元気よく・・・。

いっ君　いらっしゃいませぇっ！

安田はその声に一瞬ビクっとするが、生田にガンを飛ばして舌打ちをする。
生田は満面な笑みを湛えている。

いっ君　どうぞ、お好きな席にお座りくださいませぇ～。

生田はカウンターへ。
安田は座ったあとも辺りを見回している。
生田が水の入ったコップを盆にのせて運んでくる、途中くしゃみをして手で鼻水を拭う。

いっ君　はいどうぞ。（水を出し）ご注文はお決まりですか？
安田　おお、おお、おお、ちょっと待てや。
いっ君　ちょっと待ちます。
安田　・・・お前ふざけてんのか、汚ねえだろうが。こんな水飲めるか、手洗って入れなおしてこい。

生田はくしゃみが出そうになるが、ギリギリのところで止まる。

いっ君　・・・。
安田　お前聞いてんのか？
いっ君　ハックション！
安田　うわ、汚、汚ねっ。

生田はいつの間にか、水を下げてカウンターの方へ。

安田　お前ケンカ売ってんか！　（目の前には誰もいない）あれ、（舌打ちをして）おい、お前ちょっとこっち来いや！　・・・こっち来いって言ってんだろうがぁ、ああ。

こずえ　（オフで）いっ君、どうかした？
いっ君　問題なし。
安田　問題あんだよ！

こずえ、出て来て。

こずえ　いっ君、何かあったの？
いっ君　足を洗って出直してきます。
こずえ　え、足を洗う？
安田　おい、シカトしてんじゃねぇよ！
こずえ　あら、お客さん来てたのね、いらっしゃいませ。
いっ君　ハックション！
こずえ　いっ君、大丈夫？
いっ君　大丈夫。
こずえ　花粉でも入って来ちゃったのかしらね。あ、お水持っていくところだったの、いいわ私が持っていくから。（生田から盆を受け取り）・・・はいどうぞ。（水を出す）ご注文はお決まりですか？
安田　お決まりですか、じゃねぇんだよ。
こずえ　はい？
安田　汚ねぇだろう、水。
こずえ　え？
安田　だから、くしゃみしてっから唾が入ってんだろうが、これっ。
こずえ　ああ、失礼しました。すぐに別のをお持ちしますので。
いっ君　（独りで）足を洗って出直してこい・・・。
安田　いらねぇよ。それより、ここの責任者、呼んで来いよ。
こずえ　はい？
安田　だからっ、責任者呼べっつってんだよ！

ドア鈴が鳴り、客が入ってくる。

いっ君　いらっしぃませっ。
こずえ　あ、岩崎さん、いらっしゃい。

岩崎は、ただならぬ空気を感じて一瞬立ち止まる。

岩崎　ど、どうか、しました？
安田　あーん、テメェーには関係ねぇんだよ。
こずえ　あはは、大丈夫ですから、どうぞ。
岩崎　はあ。（空いているテーブルに行く）
こずえ　あ、いっ君これ。（お盆を差し出す）

生田はお盆を受け取り、岩崎にその水を出す。

いっ君　ご注文はお決まりですか？
安田　ほらっ、さっさと呼べよ、責任者。
こずえ　あの、責任者は私ですが。
安田　ああ、あんた責任者？
こずえ　はい、そうです。
安田　ここの経営者、あっそう。（じろじろと辺りを見回り）あっはっはっ・・・。なんだこの店、ボロっ。（岩崎に）あんたも物好きだねぇ、喫茶店なんてここら辺にはゴロゴロあるだろうに、わざわざ一番さえない店選んで来るんだからね。
岩崎　あ、あ、アンティークな感じが落ち着くんで、それに―
安田　あぁん？
岩崎　・・・。
安田　それに店も店なら、従業員も従業員で、もっと真面なのいなかったの？
こずえ　彼には彼の―
安田　あいつあれでしょ、（指で自分の頭を指して）マジでここんとこヤバイやつっでしょ？　分かんだよね、あの手の奴。
こずえ　いっ君は確かに個性的な―
安田　いっ君？　なんだそれ、ガキじゃあるまいし、いい歳して気色悪りぃなぁ。

岩崎はコップの水を飲み干し立ち上がる。
生田は、すかさず安田の前に立つ。

安田　な、何だよお前、やんのか。
いっ君　（くしゃみが出そうになる）
安田　（のけ反る）
いっ君　（くしゃみは出ない）僕はこう見えてもいい歳してます。
安田　はあ？
いっ君　（視線は宙を仰ぎ）僕は、生田といいます。生きる、田んぼで、生田です。名前は、つよしですが、あまり強くありません。どちらかと言うと弱い方です、はい。（ウエストポーチを掴んで）なのでここには、いつもお薬を入れておきます。
安田　ああ、何言ってんだバーカ！（顔を近づけてガンを飛ばす）
いっ君　ハックション！
安田　うわっ、汚ったねっ、何しやがんだテメー、ぶっ殺すぞ！　わっ臭っ。

生田は、安田の発した見えない言葉を追いかける。

安田　おい待てコラっ、逃げてんじゃねぇーよ！

安田の携帯が鳴る。

安田　あーん？　何だっうっせーなあっ。（電話に出る）あぁ、もしもしぃ、あ、兄貴、おつかれっすぅ、はい。あ、今その店っすぅ、はい。はい分かりました、はい、はーい、はい。あ、はい。あ、失礼しまーす、失礼しまーす。

安田、内ポケットから茶封筒を出して、こずえに差し出す。

安田　これ。
こずえ　え？
安田　んっ。（封筒を突出し）
こずえ　あ、はあ。（封筒を受け取り）何ですかこれ？
安田　見れば分かるから。
こずえ　・・・はい。
安田　じゃあ、確かに渡したからね。また来っから次は兄貴と一緒に。言っとくけど兄貴マジでハンパねぇから、この俺が言うんだから間違いねぇよ。じゃそう言う事で、（行きかけて）ああ、それと・・・あいつクビにした方がいいんじゃねぇの？

一同は、飛び跳ねている生田を見る。

安田　あんたも物好きだよね。あれでしょ、あいつ本気のやつでしょ？つうかあんなの雇うくらいなら、まだ居ねぇ方がマシだし。（岩崎に）ねえ、お宅もそう思うでしょっ。まぁ真面な従業員雇うのも無理か、むしろポンコツのこの店には、ポンコツの人間がお似合いかぁ、はっはっはっあーあ・・・。じゃあそれ、よろしく頼みますよぉ。（店を出る）

一同ほっと安堵する。
生田は自分にバイバイする。
こずえ封筒が気になり中身を確認し、すぐにポケットにしまう。

こずえ　（ため息をつく）
岩崎　あのう、大丈夫ですか。
こずえ　え、ああ、大丈夫です。こちらこそごめんなさい、何だか変なことに巻き込んでしまって。
岩崎　・・・あ、あの（鞄から花を出し）これ、どうぞ。
こずえ　ありがとうございます、わー綺麗、いつもすみません。
岩崎　いえ、このお店には花が映えますし、それに・・・えーっと、あはは。
こずえ　そうなんですよね、このお店ほんと何もなくて殺風景だから、おまけに（せり出す枝を一度見上げ）これですから・・・。
岩崎　はい。あ、いえあの、そう言うつもりではなくて、あの以前に広居さんが、この店に花でも飾っておけば雰囲気も明るくなるだろうからって言ってたから。
こずえ　岩崎さんは本当に優しい方ですね。私が何気なく言った事も覚えてくださって。
岩崎　ああいえ、まあ。こちらこそ広居さんが喜んでもらえたのなら本望です。
こずえ　ええもちろんです、それにいっ君も植物が大好きですし。（生田を見て）
岩崎　・・・。
こずえ　どうかしました？
岩崎　いえ別に。
こずえ　（空いたコップを見て）あ、ごめんなさい、いつものコーヒーでよかったですか？
岩崎　はい。
こずえ　はい、すぐに淹れて来ますので。（空いたコップを持って）いっ君、いつまでやってんの、ちょっといっ君。
いっ君　（自分にバイバイしながら）なんですか、呼びましたか？　こずえさん。

こずえは一度、花をテーブルに置き、生田のバイバイする手にコップを掴ませて。

こずえ　はいお仕事、お仕事、ポン。（と、お尻を押す）
いっ君　こずえさんは相変わらず人使いが荒いんですから。
こずえ　何言ってるの、ちょっとコップを片づけるだけでしょう。
いっ君　「喫茶あなたの止まり木」は、ブラック企業です。
こずえ　はいはい、もうどこでそう言うこと覚えるのかしら、（岩崎に）すみません騒がしくして。
岩崎　いえ。

生田とこずえがカウンターで仕事をしているところを、
岩崎は遠くから見つめている。

いっ君　はい、キレイになりました。
こずえ　はい、よくできました。（花を瓶に入れて）ほらいっ君、これ岩崎さんに頂いたのよ。
いっ君　僕は、花は、いただきませんので。
こずえ　誰も食べないわよ。ほら、あそこのテーブルに飾ってきて。
いっ君　飾ってきます。
こずえ　ちゃんとお礼も言うのよ。

生田は花瓶を持ってテーブルに行く。
花瓶を置き、そのまま戻ってくる生田に。

こずえ　いっ君お礼は？
いっ君　（岩崎の所に行き）足を洗って出直してこい。
岩崎　・・・。
こずえ　こらっ、いっ君ちがうでしょ。ありがとうございましたでしょう。
いっ君　ありがとうございました。
岩崎　いえ。
いっ君　（岩崎の向いの椅子に座り）あの、一つ聞いてもいいですか？
岩崎　え、ああ、どうぞ。
いっ君　あの、岩崎さんは、いい人ですか？
岩崎　えっ、ああ、まあいい人、かな。
いっ君　まあいい人ですか、本当にいい人ですか？
岩崎　うん、いい人ですよ。
いっ君　よかった、最近は物騒な世の中ですからね。
岩崎　ああ、そうだね。
いっ君　人は見かけによりませんから。こう見えても僕は、一人では生きていけませんし、こずえさんには感謝してますので。
岩崎　はあ。
いっ君　こずえさんを狙ってるんですか？
岩崎　え、いや、あの、狙ってるってゴルゴじゃあるまいし。
いっ君　（話は聞かずに立ち上がり）こずえさん、こずえさん気をつけてください。狙われてますから気をつけてください。
こずえ　（コーヒーを持っていきながら）いっ君、騒がしくしないの。お客さんがいるまえでしょう、迷惑になるでしょう。
いっ君　大体自分で自分の事をいい人って言う人に限って怪しいもんですから、おそらくは変人ですから、だって僕の唾の入った水も平気

で飲み干しますし。
岩崎　えっ！
こずえ　そう言えば、いっ君は薬は飲んだの？
いっ君　飲んでません。
こずえ　ほら、それじゃあ飲まなきゃ、お薬。
いっ君　お薬飲まなきゃ（座り込みポーチから薬を出す）お薬飲まなきゃ、お薬飲まなきゃ、お薬を飲みます、お薬を飲みます。
こずえ　いっ君、そんな所に出さないで、ほらお客さんが居るんだし。
いっ君　たった一人ですけど。
こずえ　一人でもお客さんはお客さんでしょ、ほら裏に行って飲んできて、聞いてるのいっ君。
岩崎　自分なら別に構いませんけど。
こずえ　いいえ、癖になるといけないので、こういうのはちゃんとしておかないと。（コーヒーは一旦テーブルに置いて薬を生田に持たせる）ほら一人で飲めるでしょう。
いっ君　こう見えてもいい大人ですから、薬くらい一人で飲めます。（事務所へ）
こずえ　やれやれ、本当にすみません騒がしくして、（コーヒーを出し）どうぞ。
岩崎　いえ、自分は大丈夫です。
こずえ　皆が岩崎さんみたいに理解があればいいんですけどね。
岩崎　大変ですね、いろいろ。
こずえ　まあ、今に始まった事じゃないですし、それにもともと福祉の仕事をしていた時から彼の事を知っているので、もう慣れっこですから私は。
岩崎　そうですか、（コーヒーを一口飲み）あの、手伝いましょうか？
こずえ　え？
岩崎　いや、あの、自分、この店手伝いますよ。
こずえ　え、手伝うって、でもお仕事とか・・・。
岩崎　ああ、仕事ね、仕事の事なら大丈夫です気にしないでください。自分は、まあ、なんと言うか、そのフレックス出勤なんですよ、ほとんどは在宅勤務なので時間にはゆとりがあるんですよ、ええ。
こずえ　え、でも。
岩崎　それにさっきも、あのガラの悪い人が言っていた事も一理あるのかなって。
こずえ　さっき言ってた事？
岩崎　ええ、従業員の事とか。
こずえ　（事務所の方をチラッと見て）ああ。
岩崎　いや、別に彼がどうとかじゃなくて、普通のというか、あのちゃんとした人というか、とにかく自分なら広居さんの力になれると

こずえ　思うので、もしあれだったら・・・。
ありがとうございます。正直このお店をやっていくのに、私といっ君の二人だと色々と問題があるのはあるんです。でも見ての通りあまり景気も良くなくて、新たに人を雇うどころか、このお店をやっていくのも・・・。

岩崎　別に自分なら給料とかはいりませんし。

こずえ　いえ、そういう訳には。

岩崎　それに学生の頃、喫茶店でアルバイトしてた事もあるので、大体の事は出来ると思うし。

こずえ　でも。

岩崎　何よりも、好きなんですっ！

こずえ　え。

岩崎　いやあのっ、ここ、此処がっ、この店が好きなんです。何にもなーい、ぼろーい、この殺風景な感じが。

こずえ　・・・。

岩崎　いや、あの、違うんです。さっきも言いましたけど、あの、あ、アンティークな感じがとても自分には落ち着くんです、ええ、はい。ですから、まあ何と言うか、あの、急な提案なので今すぐに返事をどうのとかは難しいと思うので、良かったら少しだけでも考えてもらえたらなぁと、ええ、はい。

こずえ　・・・はい、ありがとうございます。

岩崎　あ、いえ、そんな、ありがとうございますだなんて、ええ、まあ、はい。（コーヒーを飲み干し）ごちそうさまでした。（財布を出しながら）あの、今日はこれで失礼します。

こずえ　あ、はい。

岩崎　（テーブルにお金を置き）それじゃあまた。（逃げるように店を出て行く）

こずえ　あ、ちょっと、お釣り、岩崎さんっ。

こずえ後を追い店を出て行く。
誰もいない店内・・・照明が変化して生田が空き缶袋を手に現れる。
そして、植物の近くに座り込み。

いっ君　あのさ、あのさ、せいちゃんはさあ、ずーっとお部屋の中にいて苦しくないの？　僕はさあ、やっぱりさあ、お外に出てさ、お散歩したいしさ、それにお外にはさ沢山の緑があってさ、ぎゅっと僕たちのことを抱きしめてくれるからさ、緑の見えるお散歩がさ、好きだな。・・・今度さあ、せいちゃんも一緒に行く？　・・・う

んいいよ、じゃあ連れて行ってあげる。

生田は植物の中から黒い物を見つけて手に取り。

いっ君　これ何？　・・・いいなぁ、・・・ええ本当に、ありがとう。（それをポーチにしまう）

こずえが戻ってくる。

こずえ　見失っちゃった。（手のお金をポケットにしまい）また今度でいいか。

こずえはテーブルのコーヒーカップを片づけようとした時に、生田に気づく。

こずえ　あらいっ君、そんな所に座って何してるの？

いっ君　こずえさん、こずえさん（こずえの所へ行き）ちょっと座ってください。

こずえ　ええ何。

いっ君　いいから、ここに座ってください。

こずえ　（椅子に座る）はい。何、いっ君。

いっ君　とりあえずですね、これで我慢しといてください。

照れながら、ポーチからタコ糸を出して、こずえの頭の上にのせる。

こずえ　ええ、（それを手にして）何これ？

いっ君　何これって、決まってるじゃないですか。

こずえ　タコ糸？

いっ君　（呆れて）タコのはずがないでしょう、足が八本ついてますかぁ。こずえさんは僕と同じおバカになったんですか？　もう、誰がどう見たってこれはネックレスでしょう。

こずえ　え、ネックレス？

いっ君　こずえさんが昔お仕事中に、大事な家族の大事なお父さんの形見のネックレスが千切れたでしょう。こずえさんのお仕事は大変な重労働ですので千切れましたでしょう。

こずえ　・・・別に、いっ君のせいで千切れた訳じゃないのに。

いっ君　こずえさんのガッカリした顔を見るのは御免ですので、とりあえず今のところはそれで堪忍してくだせい、お願ぇします後生ですので。

こずえ　あんな前のことを・・・。
いっ君　それじゃ駄目ですか。
こずえ　駄目だなんて、そんな事ないわよ。
いっ君　じゃあ早く着けてください。

こずえはネックレスを何とか頭に通そうとするが、輪っかが小さくて通らない。

こずえ　あれ、ちょっと無理かなこれ・・・。
いっ君　はぁ～。やっぱりあれですか、やっぱりあの、女の人というのは実際正直なところ、何だかんだ言っても高価な物の方がいいんですよね。
こずえ　そんな事ないわよ。でもやっぱり、これはちょっと頭が通りそうにないから・・・。
いっ君　（肩を落とし）やっぱりブランド物じゃないと駄目って言う事でしょう。
こずえ　そんな事言ってないでしょう。
いっ君　所詮世の中お金ですから。はぁ～あ、僕の頭の悪さに付け込んで金品をせびる、これが世の常ですか。
こずえ　なに言ってるの。
いっ君　だって大体、女子アナは野球選手を狙ってますから、と言うよりハイスペックなのがいいってお友達が言っておりましたが。
こずえ　え、友達ってだれの。
いっ君　（独り淡々と）そこに愛はありますか、諭吉はおりますけど本物の諭吉はもうおりません、僕にはこずえさんがおりますので、野口さんで十分です・・・。

喋り続ける生田を微笑みながら見ているこずえ。
そんな二人のほのぼのとした空気の中、
音楽が高まり溶暗。

２場

１週間後の午後。
カウンターで電話をしているこずえ、その向かいの席には、上沼えみが座っている。
舞台奥のテーブルには岩崎が気配を消して座っている。

手前のテーブルには安田が座っており、その向かいに、厳つい顔をした男（村岡りゅうじ）が、サングラスをしてカウンターに背を向ける形で座っている。

こずえ　朝の無言電話したのお母さん？　あ、そうなん、うん、なんでもない。もう、来るときは前もって電話してっち言ったやん、うん、うん、うん分かったっちゃっ、はい、はいはい。（電話を切る）はぁ～。

えみ　お母さん、何て？

こずえ　後でここ来るって。

えみ　え、来るって、こずえのお母さん九州に住んでるんでしょ？

こずえ　うん、そうなんだけど、もうこっちに来てるって。本当うちのお母さんは思い立ったらすぐ突っ走るんだから、こっちの都合も考えずに。

えみ　ここに来ると何か不都合でもあるの？

こずえ　別にないけど。

えみ　でもそう言うとこ、こずえ似てるよね。

こずえ　え、そう言うとこって？

えみ　向う見ずに自分一人で行動するところ。

こずえ　私そんな事しないわよ。

えみ　よく言うわねあんた。突然仕事を辞めたと思ったら、この喫茶店始めたじゃない、いきなり。

こずえ　ここは・・・周りと比べて家賃とかがメチャクチャ安かったし、それにもともと私は喫茶店をやってみたいっち言いよったやん。

えみ　言いよったやんって、方言で言われてもねぇ。

こずえ　あ、ごめん方言出とった？

えみ　（桜の木を見て）そりゃあ、こんなに木の枝が壁を突きだしている店舗なんて、誰も借りないでしょう。安くて当然よ。だからっていくら安くても普通はどうにかするでしょう、あの枝。

こずえ　だって枝を切ったり、壁を修理したらお金がかかちゃうでしょう。それに、そもそもここの家主さんが、あの木は切らずにあのままで、と言うのが条件で貸してくれたんだもん此処は。

えみ　居るわよね、たまにそう言う変わり者が。

こずえ　でも家主さんの話を聴いてたら、ちゃんとした普通の人だったわよ。

えみ　（もう一度枝を見て）普通ねぇ。

こずえ　（家主さんの口ぶりで）「現代人は都合が悪い事はすぐに切り捨ててしまうだろう、何でも自分の思い通りにしょうとする。まるで王様にでもなったつもりか。外から見れば貴族だが、内から見れば物貰いだ。豊かになった現代社会に心を奪われた奴隷だよ。」と

か何とか言ってて・・・。
ええ、その手の人ね。寂しいのよ、時代が変わっていくのが。
・・・とにかく悪い事ばかりじゃないわよ。
えみ　何が？
こずえ　ほらよく見て、もうすぐ咲くわよ、桜。お店の中にいても、お花見が出来るのよ、ステキでしょう。
えみ　それはステキね。
安田　ね兄貴、あれやばいっしょ。この店、余計なもんはあるのに肝心なもんは何もねぇし。つーか、やばいの店だけじゃないんすよっ、ここで働いてる従業員もマジやばいっすから。なんつーかもうポンコツもいいとこポンコツで、まああれ見つけてくる方が至難の業っすよ。だって真面に会話すら出来ねぇんすから、（村岡の顔を見て）えへへ。
村岡　・・・。
安田　あ？　あーあ、（立ち上がり）おいっコラっ、この店はお客様に水も出さねぇのかっ！　それとも水道代も払えなくて止まっちまったのかっ、ああ！
こずえ　あ、はいただいまっ。
安田　さっさと持って来いっ、干からびっだろうがっ！
村岡　おい。
安田　はい、何すか兄貴。

村岡は安田の頭を叩く。

安田　痛てっ、すいません、すいません・・・、何すか？
村岡　お前、ペラペラとうるせぇんだよ、女子か。
安田　あ、はい、すいません。
村岡　今日は、ここに何しに来たのか分かってんだろうがぁ、ああ？
安田　はい、分かってます。
村岡　お前と仲良く茶しに来たんじゃねぇんだよ。（貧乏揺すりをしている）
安田　はい・・・。

村岡の貧乏揺すりが徐々に大きくなる。

えみ　こずえ、あの人達よく来るの？
こずえ　うんん、来ない、（チラっとポケットの茶封筒を見て）けど・・・。
えみ　けど、何よ？
こずえ　うん、まあ、ちょっと・・・。
えみ　ちょっとって何よ。

こずえ　・・・。
村岡　おい、やす。
安田　はい、すいません兄貴。
村岡　まだ何も言ってねぇだろうが。
安田　あ、はい、すいません。
村岡　便所何処だ？
安田　え、多分あっちと思うんすけど、いや、あっちかな、ちょっと聞いてきます。
村岡　いいよ、自分で探すから。
安田　あ、はい、すいません。

村岡は立ち上がり辺りを見回す。
こずえは水を手にして。

こずえ　あ、御手洗いでしたらそちらです。
村岡　ああ、（こずえに一瞬見とれるがすぐに顔を逸らし）お、おう。（トイレへ入る）
こずえ　（水をテーブルに置き）ご注文はお決まりでしょうか？
安田　今日は、あのポンコツいねぇの？
こずえ　え？
安田　だから、ポンコツだよ。
こずえ　ポンコツ、ですか？
安田　そうだよ、ポンコツだよポンコツ。
こずえ　・・・。
安田　この前の従業員だよ、ポンコツって言ったら、あいつしかいねぇーだろ（岩崎に）なあぁ？
岩崎　ああ、ははは。
こずえ　彼は今、裏で休憩中です。
安田　まだ居んだ？　使えない従業員雇う余裕なんてないでしょうに、あんたもさぁ、もっと金の使い方考えた方がいいんじゃねぇーの。無駄な経費は削減しないと・・・ねぇ。
こずえ　・・・。
岩崎　あ、あの、お、おかわりいいですか？
こずえ　あ、はい。
安田　ポンコツで思い出したんだけどさあ、此処のポンコツに負けねえくらいのポンコツを、こないだ見たんだよ。（岩崎とこずえの間に割って入り）俺がさ、夜中にコンビニ言ったんだよ、兄貴が挽きたてのコーヒーが飲みたいって言うから。そしたらよう、このクソ寒い中、半袖半ズボンのおっさんがそのコーヒーマシンの前でじっとつっ立ってんだよ、別にコーヒー買う訳でもねぇーのに。

でさぁ俺がコーヒー淹れてる間、近くでじっとこっち見てんだよ気色悪りぃ。まだそれだけならいいんだけどよ、何か臭せぇんだそいつ。それによく見りゃあ小汚いしよ、どう思う？

こずえ　・・・・。（顔を逸らす）

安田は岩崎の方に視線をやる。
こずえは静かにその場を去る。

岩崎　え、まあ、そう言う、あれなんじゃないですか・・・。

安田　ホームレスだよそいつ、間違いなく、寒さ凌いでんだよコンビニで。んでおまけによ、そいつ何食わぬ顔して目の前にある、あのコーヒー用のポーション飲んでやんの。それも一つどころか店員が気付くまで何個も何個も・・・。それで命繋いでんだぜあれ。ポーション飲んで体力回復か？　ドラクエじゃあるまいし。

岩崎　それなら、ファイナルファンタジー、とかの方が・・・。

安田　ああ、何が？

岩崎　いや、別に・・・。

安田　つーかさぁ、あれってさぁ、万引きになんの？

岩崎　・・・。

安田　でもさ、あれってタダでしょ、って言う事は万引きにはなんねぇーのか。あいつらポンコツも考えてやってんのかな、そこらへんは、はっはっは。ポンコツにはポンコツなりの生き方があるってか、はっはっはっは。

トイレから水の流す音がする。
何だか変な音。
村岡が出てくる。

安田　ああ兄貴、長かったっすね、うんこっすか？

皆の視線が村岡へ。
その視線を受けて。

村岡　違うわボケっ、お前ぶっ殺すぞ！

安田　す、すいません兄貴。（小声で）そんなムキになる事ないのに。

村岡　ああ？

安田　すいません。

こずえ　おトイレ、壊れてました？　最近また調子がよくなくて。

村岡　（一度こずえを見るが顔を逸らし）ああ、いや別に問題ありません。ただ、花、あったでしょうトイレ。ちょっとそれ見てただけ

こずえ　ですよ。だからその・・・（目の前にある植物を弄りながら）キ、キレイだなってね・・・。
村岡　好きなんですか？
こずえ　（一瞬ビクッとする）
村岡　私も好きなんです。
こずえ　（ゆっくりと振り向く）
村岡　植物。花とか緑があると落ち着きませんか？
えみ　（背を向けて）お、おお、まあなあ、落ち着く、落ち着く、（葉っぱの臭いを嗅いだりして）ああ落ち着くぅ～。
こずえ　何か危なくない、あの人・・・。
えみ　それ、あちらのお客様から頂いたんですよ。
こずえ　ちょっと、こずえ。
えみ　ん？

村岡の視線は岩崎へ、そしてゆっくりと歩み寄る。

えみ　あの人達なんなの？
こずえ　何なのって、そりゃお客さん・・・。
えみ　だってなんかガラ悪いし、あっちのうるさい方は感じも悪いし、あんなのが出入りしてたら、他のお客さんも寄りつかないわよ。ただでさえこの店は閑古鳥が鳴いてるんだから、店の名前変えたら。

村岡は岩崎の向いの席に座ってじっと岩崎を見ている。
岩崎は小さくなって下を向いている。

えみ　何であの人達わざわざこの店を選んだのかしら、喫茶店なんて他にいくらでもあるのに、ねえ。
こずえ　う、うん。
えみ　それともこずえ、何か目をつけられるような事でもしたの？
こずえ　え、（何かをこぼす）あ、あーあ。
えみ　何動揺してんのよ、え、まさか図星？
こずえ　あーあ、いやだ汚しちゃった。

こずえは前掛けを取りカウンターに置く。
その拍子に茶封筒が落ちる。

えみ　ああ、何してんの、もうほらっ。（カウンター周りを拭く）
こずえ　あ、ごめん、ありがとう。
えみ　（茶封筒を手に）あ、これ汚れちゃうわよ。

こずえ　（必死になって封筒を取り上げ）ありがとっ、ありがとっ、ありがとうね、うんもう大丈夫だから、うんえみ、ありがとう。
えみ　何よ、何そんなに慌ててるのよ・・・。
こずえ　いや、別に。
えみ　ねぇ、その封筒なに？
こずえ　え、これ、別に。
えみ　別にって、おかしいでしょう。
こずえ　えみには関係ない事だし、私の事だから・・・。
えみ　私の事。
こずえ　うんそう、お店やってると色々あるのよ。
えみ　ふーん、色々・・・。

生田が入ってくる。

いっ君　ただいま休憩終わりました。
こずえ　ああ、いっ君丁度よかった、これ岩崎さんの所へ持って行ってくれる。
いっ君　はい。（鼻がムズムズしている）
こずえ　・・・あ、いっ君やっぱりいいわ、私が持って行くから。
いっ君　はい。

こずえは落ち着かない様子でカウンターを離れる。

いっ君　やれやれ。
えみ　こんにちは。
いっ君　いらっしゃいませっ！

えみは愛想笑いを浮かべる。
生田の声がきっかけで村岡らは、こずえが向かって来ることに気が付き、もと居た席に戻る。
生田はプルトップの入った瓶を出し、中身をカウンターに広げて数えている。

えみ　いっ君、何してるの？
いっ君　・・・。
えみ　プルトップそれ？
いっ君　・・・。
えみ　コレクションしてるの？
いっ君　・・・。
えみ　今度私も持って来てあげるね。

いっ君　・・・。
えみ　いっ君、私、誰だか覚えてる？
いっ君　・・・。
えみ　聞いてるのかな？
いっ君　こずえさんのお友達で、大学生の時の同級生で、アナウンサーを目指していましたが、どこの局にも取ってもらえなかったので、今は得意のしゃべりを活かして、イベントや結婚式などの司会業をやっております、上沼えみです、よろしくお願いします。
えみ　しっかりと覚えてくれてるのね。
いっ君　独身、彼氏なし、理想のタイプはハイスペックでお金も・・・。
えみ　（遮り）うんもう大丈夫だからねっ、いっ君、ありがとう。
いっ君　どういたしまして。
えみ　て言うか、記憶力いいのね。
こずえ　（改めて）ご注文はお決まりですか？
安田　兄貴、どうします？
村岡　（こずえに背を向けて）おい、やす。
安田　はい、何すか？
村岡　ちょっとこっち来い。

村岡は安田に耳打ちする。

安田　いや、従業員っていうか、この店の責任者らしいですよっ。
村岡　（蹴飛ばす）バカ、声でけぇんだよお前っ。
安田　はい、すいません、すいません。

また耳打ちする。

安田　え、名前っすか？
村岡　（安田を睨む）
安田　・・・（こずえに）名前、なんだっけ？
こずえ　え、名前ですか？
安田　そうだよっ、名前だよ。

村岡は安田を蹴飛ばす。

安田　痛っ、え、何すか兄貴。

村岡は安田の頭を脇で固めて。

村岡　お前、口の聴き方知らねぇのか、もっと丁寧に喋ろや。

安田　はい、はいすいません。

二人は落ち着き、安田は村岡の視線を感じながら。

安田　お名前は、何だったでしょうか？
こずえ　うちの名前は「喫茶、あなたの止まり木」です。
安田　だそうです兄貴。
村岡　（蹴飛ばす）
安田　痛っ（自棄になって）むしろもう気持ちいいっ。
村岡　お前バカかっ、店の名前聞いてどうすんだ、このポンコツがっ。
こずえ　あのう。
村岡　（改まって）ああ、また後で呼びますので、どうぞ仕事に戻られてください。
こずえ　あ、はい。
安田　直接、話せるんじゃん。
村岡　あぁ、テメェ誰に口訊いてだオラっ。

安田は村岡にボコボコにされる。
その様子を岩崎は見ている。

安田　（岩崎に）お前何見てんだよコラ、痛っ。見せもんじゃねぇーんだよ、痛っ。
岩崎　いえ別に、見ていません・・・、うふっ。
安田　お前、今笑ったろ？
岩崎　いえ、笑っていません。

安田と岩崎は、笑ったろ、笑っていませんを繰り返す。

安田　（岩崎の所に行き）笑って・・・。
岩崎　（顔を隠したまま）いいとも。
安田　はいっぷっ殺す。
岩崎　ちょっと、ちょっとタイム。
安田　タイムとかあるかっ、根暗っ。
えみ　何だか騒がしいわね。
こずえ　ゴメン。
えみ　ああ、いや別にいいけど。
こずえ　あ、いっ君また数えてるのそれ、お仕事中は数えるの禁止って約束したでしょうもう。聞いてるのいっ君。
えみ　いいじゃない、別にこれくらい。
こずえ　ダメよ。えみは知らないから、これくらいって思うかもしれない

けど、一度集中したらもう何も手につかないんだからいっ君は。
ほっといたら閉店になってもやってるんだから。
えみ　そうなんだ。
こずえ　そうよ、それによく考えてよ、うち飲食店なのよ。プルトップとはいえ、ゴミ箱に捨てられていた缶の一部よ、衛生的にもよくないでしょう。
えみ　まあ、そうね、神経質な人なら文句言うか。最近は何かとうるさいし、「東京は日本で一番世知辛いところである」ってね。
こずえ　でしょう。ああいっ君、空き缶も持って来てる。駄目じゃない店の中に入れちゃあ、ほら片づけて来て。
いっ君　・・・。
こずえ　生田つよし！
いっ君　はい。（片づけて裏へ行く）
えみ　プルトップなんて集めて何が楽しんだろうね。
こずえ　さぁね、でも一度やりはじめたら、とことんこだわるからね、いっ君は。せめてゴミ以外の物にしてくれたらいいんだけど。
えみ　ところで、こずえ。
こずえ　何？
えみ　さっきの封筒なんだけどさぁ。

生田戻って来て。

こずえ　空き缶、外に出して来た？
いっ君　まだあります。（もう一つの空き缶袋を取りに来る）
こずえ　ああ、本当（袋を取って）はい。
いっ君　どうもです。
えみ　あれってさあ。
いっ君　貰いました。
えみ　え？
いっ君　（安田たちを指して）あちらさんに貰いました。
えみ　封筒を？　そうなの？
いっ君　僕が嘘をつくように見えますか？
えみ　・・・見えない。
こずえ　ちょっといっ君、早くゴミ捨てて来て、汚いからっ。

生田、裏へ行く。

えみ　え、何あの人から貰った・・・。
こずえ　いや違うのよ、あの、貰ったは貰ったんだけど、貰うとかそう言

えみ　うのじゃなくて・・・。
こずえ　ラブレター？
えみ　はあ？
こずえ　何だ、そうだったんだ、通りで変だと思った。これで合点がいくわ。
えみ　何か勘違いしてるから、えみ。
こずえ　いいって、いいって、なるほど。そうじゃないと、あんなのがこの様な店に来るわけないもんねぇ、この店禁煙だし。
えみ　今時、禁煙の店なんて沢山あるでしょう。
こずえ　普通、あの手の人たちが入るような喫茶店って、やっぱり地下にあって、煙草臭くて、薄暗い雰囲気のとこでしょ。
えみ　いや、だから。
こずえ　こずえは学生の時からそこそこモテたしねぇ、なんか守ってあげたくなるタイプだし、んでもってこんなでも意外としっかりして真面目。
えみ　意外とってなによ。
こずえ　だけど少しドジ、男受けするんだろうねぇ。その点私は何て言うか、あまり隙を見せないタイプだから近寄りがたいらしいのよねぇ、そんな事ないのにねぇ。
えみ　知らない。
こずえ　ねえ、どっち？
えみ　え？
こずえ　やっぱあっちか、厳つい方。何かこずえの事を意識してる感、満載だもんね。
えみ　だから、そう言うのじゃないってこれは・・・。
こずえ　でも私は正直どっちも無理。見た目はともかく、やっぱり堅実な人じゃないと。
えみ　分からなでしょうそんなの。雰囲気はちょっと近寄りがたいけど、意外と堅実な人かもしれないでしょう。
こずえ　何でこずえはそう思うの？
えみ　え、だってほら、さっき緑があると落ち着くって言ってたじゃない。植物が好きな人はピュアな人、多いでしょう。
こずえ　そうとは限らないでしょ、それにあの人が落ち着くのは葉っぱよ。
えみ　葉っぱ？
こずえ　そう葉っぱ。・・・だから大麻よ、脱法ハーブの類よ、さっきもあの人怪しかったでしょう動きが・・・。大体あの人達、何の職業なのよ。
えみ　それは、おそらく・・・。
こずえ　薬の売人なんじゃないの。
えみ　えみっ聞こえちゃう、声大きいから。

えみ　あ、ごめん。とにかく勢いだったり、その場の流れで決めちゃうと、後で失敗することになるからよく見極めなさいよ、自分の目で。あれだったら私も相談に乗るから、伊達に結婚式の司会やってる訳じゃないわよ。何組もカップル見て来てるんだから、何となく分かるのよ、あ、この夫婦は何年くらい続くなってのが・・・。

こずえ　だから違うって、それに私は―

えみ　あ、そうよね。しんや先輩がいるもんねぇこずえは。その事はちゃんと言ってるの。あ、でもあえて言わずに三角関係ってのも燃えるわよねえ。何の弊害もなくくっ付くより、恋のライバルがいて、お互いが愛情の深さを競い合った末に結ばれた方が、より深い家族になれるだろうし。一難あった方が、ちょっとした下らない理由で離婚なんて事にもなりにくいだろうから。

こずえ　（呆れて）・・・。

えみ　最近は何かあれば、すぐ別れるでしょう。学生の恋愛じゃないんだからね。別れた当人たちはいいかもしれないけど、一番の被害者は周りよね、特に子供かしら親の都合で、ねぇ？

こずえ　・・・。

えみ　聞いてる？

こずえ　はい聞いてるわよ。

えみ　何か私なんかわさぁ、仕事柄いろいろ考えちゃうのよね。結婚ってなんだろう、家族になるってなんだろうって・・・。いろいろ悩んでるのにさ、親はさぁ、いつまでブラブラしてるんだとか、早く孫の顔が見てみたいとか勝手な事を言ってプレッシャーかけてくるのよ・・・、家族ってめんどくさい・・・。

村岡　おいっ、やす、ちょっと来い。（耳打ちして）

安田　え、それ仕事と何の関係があるんすか？

村岡　いいから、お前は黙って俺の言う事を聞いとけばいいんだよ。

安田　はい、すいません兄貴。

安田はカウンターの方へ行き。

えみ　（安田に背を向けたまま）でもやっぱり何だかだと言っても見た目は重要よね、こずえ。

こずえ　ん、うん、そうね。

えみ　そうねって、言ってたじゃない。どちらかと言えば爽やかな感じの人がいいって。ほらあんた昔の、あのＴＯＫＩＯの長瀬くん、それもデビューしたての頃のね。あの半ズボン姿がたまらないっ、セクシーって言ってたでしょう。

こずえ　そんな事言ったかな。

えみ　言った言った。

安田　ジャニーズの、長瀬、智也？
えみ　そうそう。
安田　半ズボン？
えみ　そうそう。
安田　爽やかでセクシー？
えみ　あれで、♪君が好きだよ～、って歌われたら誰でも好きになるわよねぇ、こずえ。
こずえ　うーん、まあ、なる、かなぁ？

安田は村岡の所へ戻る。

えみ　まあでも、私もどちらかと言えばＴＯＫＩＯよりかは嵐の方かな。何て言うか嵐のメンバーは五人とも仲良しじゃない、それがすごく好感もてるでしょう、何か楽しそうだし。でも正直、今は私ジャニーズじゃないのよ、ＫＰＯＰ（話は続いている）・・・。

安田は村岡に伝え、村岡立ち上がる。

村岡　よしわかった、やす帰るぞ。
安田　え、帰るんすか？

村岡は店を出て行く。

安田　え、兄貴いいんすか？　・・・金どうするんすかぁ兄貴、ちょっと待ってくださいっ。

安田、店を出る。

こずえ　ありがとうございました、何も頼まないで帰っちゃった、あっそれ。
えみ　（タコ糸で綾取りをしている）え、これ？
こずえ　そう。
えみ　（綾取りをしながら差し出して）はい。
こずえ　いや、そうじゃなくて。
えみ　何？
こずえ　それ、私の。
えみ　ああ、（タコ糸を渡す）はい、・・・何に使うの、そのタコ糸。
こずえ　ネックレスよ。
えみ　え、ネックレス？
こずえ　そう、ネックレス。

えみ　それが？　いや、ただのタコ糸でしょう。
こずえ　まぁそうなんだけど、いっ君が私にプレゼントしてくれたのよ、これ。
えみ　へぇーそうなんだ。何でタコ糸、いやネックレスを。
こずえ　私がね、前の職場でしてたネックレスが千切れちゃったのよ。それでそのネックレス代わりだって言って作ってくれたの、いっ君が。
えみ　ふーん、そうなんだ。
こずえ　実はその千切れたネックレスは、私の父の形見だったのよ。それで大事にしてたんだけど、ほら利用者さんで時々パニックを起こして暴れる人もいるでしょ、その時にね。
えみ　大変ね。
こずえ　その時に丁度いっ君も居てね、一緒に場を鎮めようとしてくれていたから、彼なりの責任を感じていたのかな。
えみ　いいとこあるのね、彼は。
こずえ　ヒーローだったのよ、いっ君は。
えみ　ヒーロー？
こずえ　そう、いっ君は施設内で、いつも困っている人や弱い人の事を守ってあげていたの。だから皆にはヒーローって言われていて、仲間からとても慕われていたのよ。
えみ　そうなんだ、でも何でそのヒーローは施設を出てここで働いてるの？　こずえは兎も角として。しかもヒーローはここで寝泊まりしてるんでしょう？
こずえ　え、うんまあ、それは色々あるから。
えみ　え、もしかして二人は付き合ってんの？
こずえ　何バカなこと言ってるのよ、そんなことある訳ないでしょう。
えみ　そうよね、そんなことある訳ないわよね。流石に障害者の彼と恋人になりたいとは誰も思わないわよね。
こずえ　・・・。
えみ　あ、ごめん。

店のドアが開き、大きな荷物を持った女（広居ようこ）がキョロキョロしながら入って来る。
どことなくお水（水商売）の匂いが漂っている。

ようこ　ここであっとるかな？
こずえ　いらっしゃいませって、お母さん。
ようこ　ああ、よかった、合っとった合っとった。ちょっとこずえ、これ持って。
こずえ　お母さん、駅に着いたら電話してくれればいいのに、そしたら迎

えに行ったのに。
駅に着いてもまたあの人ゴミの中やろう、もう。目の前にタクシーが止まっとったけ、電話せんで乗った方が早いっち思ってね。
あの人ゴミっち、そんなでもないやろう。東京駅とか新宿駅に比べたら。

ようこ　あたしにとっては何処も同じよ東京は、何であんなに人が多いんかね。

こずえ　東京はあれが普通なんよ。（荷物を置く）

ようこ　こっちじゃ年中わっしょいでもやりようみたいやねえ（座る）ふぅ〜。ちょっとこずえ、何か飲み物ちょうだい。

こずえ　お水でいい？

ようこ　うん。

えみ　ねぇ、こずえ。

こずえ　ん、何？

えみ　わっしょいって何？

こずえ　ああ、地元のお祭りよ。わっしょい百万夏まつりって言ってね、でも最近は全然行ってないな私は。

えみ　ふーん、東京では年中お祭りかぁ。

こずえ　まぁ、私も初めて東京に来た時は、確かに人の多さに驚いたわ。未だに慣れないもん。

えみ　何処から湧いてくるんだろうね、あの人だかり。まあ東京にはどこかしら甘い蜜があるんだろうね。

こずえ　甘い蜜？　蟻んこじゃあるまいし。（水を持って行く）

岩崎　あのう。

こずえ　はい？

岩崎　今日はこれで。

こずえ　あ、はい、いつもありがとうございます。

岩崎　（お金をテーブルに置いて）ご馳走さまでした。（足早に行く）

こずえ　またお待ちしてます。（テーブルのお金を手に取り、一度岩崎に視線をやり、お金をポケットにしまう）

岩崎、店を出る。

ようこ　あら、あたしが騒がしくしちゃったかしら。

こずえ　大丈夫よ、あのお客さんは良い人だから、（水を置き）はい。

ようこ　ありがとう。（水を飲む）それにしても斬新やねこの店、さすが東京。店の中に桜の木があるとか、あたし初めて見たわ。（木の近くに行き）もうすぐ咲きそうやね。

こずえ　そうなんよ、今週中には咲くんやないやっか。

ようこ　もう一週間くらいあとに来ればよかったかねぇ・・・。家賃とか

こずえ　高いんやないんね此処、こんなに洒落とんやけ。
ようこ　そうでもないんよ、東京にしてわ。
まぁ、そこらへんは社長さんがおるけ何とかなるやろうけど。

えみが振り返り、こずえを見る。
こずえは一度、えみを見て。

こずえ　あ、違うのよ。もうお母さんっ、社長さんっち呼び方やめてっち
ようこ　言ったやん。他の人が聞いたら変な誤解するやろう。
誤解っち何ね。あんたの彼、えーと何やったっけ、んー、あそう
そう山本君やったっけ、社長さんやろうもん。若いのに大したも
こずえ　んやね、あんたも去年までは一緒に働きよったんやろう、それで
ようこ　今度は喫茶店まで始めさせてもらってから。
ここは私が一人で始めたんやけ、しんや君は関係ないもん。
関係ない事があるかね、散々お世話になっとってからに。お母さ
んも改めて挨拶しとかんといけんけね。電話では何回か話したけ
ど、あんたが大学生の時に一度チラッと見ただけやったけ、もう
顔も思い出さんし。で、いつ結婚するんね。あんたももういい歳
やろ。
こずえ　今は、その話はいいやろう。
ようこ　あんたの花嫁姿を一番楽しみにしとったのはお父さんなのに・・・、
なんでかねぇ。

間。

ようこ　（身震いして）ちょっとお手洗借りるわね。
こずえ　うん、あっち。

ようこトイレに入る。
こずえ空いたコップを持ってカウンターへ。

えみ　どこも似たようなもんね。
こずえ　え。
えみ　まあ、仕方ないか、私達っていい歳だもんね。
こずえ　いい歳っていくつから？
えみ　それは・・・、理想の生活から現実味のある生活を考えるように
なった時、かなあ。

生田がお腹を擦りながら出てくる。

いっ君　あ、あの、ちょっとここん所がゴロついてきましたので、はい。
こずえ　え、トイレ。今は使用中なのよ、もう少し我慢出来る？
いっ君　んーん、少しはどれだけですか？
こずえ　えーっと、それは・・・。
えみ　いくら親子でも、人のトイレの時間までは分からないでしょう。
こずえ　そうね。

生田はトイレの前で。

いっ君　少しはどれだけですか？　ウンコしてますか？　便秘ですか？
こずえ　いっ君、ちょっと。
いっ君　あ、ああ、ああ、あ。

トイレの流れる音がする。（相変わらず調子が悪い様子）
ようこが出て来る。
生田はようこを押し退けてトイレに入る。

ようこ　何ねっ、もおあの人。
こずえ　ごめん、お母さん。
ようこ　ちょっと、トイレ大丈夫？　あれは直した方がいいんやないと、
こずえ　こずえ。
ようこ　うん。
こずえ　さあ、そろそろ行こうかな。
ようこ　行くっちどこに？
こずえ　ホテルにチェックインしとかんとやろ。それに夜は（チラシを出して）ここに純子ちゃんの歌を聴きに行くんよ。東京タワーをバックに一杯飲みながらね、洒落とるやろ。
ようこ　純子ちゃん？
こずえ　あれ、言っとらんかったっけ？
ようこ　何も聞いとらんよ、そんなん。
こずえ　そうやったかね。ほら、お母さん俳句を習いよるっち言ったやろ。
ようこ　うん。
こずえ　そこの先生とこの娘さんよ。普段は福岡で歌を歌いよるんやけど、今回は東京のほら、それに載ってある。
ようこ　六本木の。
こずえ　そう、六本木のバーで歌うっち言うけね、行くんよこれから。たまにはいいやろう、せっかく東京に来たんやけ。普段は小倉の自分の店で、おじ様達の歌ばっかり聴いとるけ、気分転換に。だけ思い切って少しだけ、お店閉めたとよ。
こずえ　大丈夫なん、お店休んで。

ようこ　しょうがないやろ、従業員を雇う余裕なんかないんやけん。それとも、あんたが帰って来て一緒に店を手伝ってくれるんね。

こずえ　・・・。

ようこ　まあ、この時期はちょうどお客さんも少ない時やけ、息抜きするのに丁度いいんよ。

こずえ　うん、そう。

ようこ　あそうや、これお土産、はい。

こずえ　なーん、これ？

ようこ　チョコレートよ、北九州世界遺産のネジチョコ。ほんとにくるくる回せるんやけ、あれやったら皆で食べり（えみを見て）ねぇ。

えみ　あ、どうも。

こずえ　ありがとう。

ようこ　（荷物を持って）よっこいしょ。

こずえ　ああ、私、途中まで送ろうか？

ようこ　いい、いい、もうタクシー拾って行くけ。それにあんたが付いて来たら店どうするんね。

こずえ　え、（えみを見て）大丈夫よ、ちょっとの間、留守番たのむけ。

えみ　え、私。

トイレの音。
生田が鼻をつまんで出てくる。

こずえ　従業員もう一人おるけ。

ようこ　なんね、あの人は此処の従業員ね？

こずえ　そう、生田つよし君。

生田が近づいて来て、元気よく。

いっ君　いらっしゃいませっ！

ようこは少し怯み、生田はようこを嗅ぐ。

いっ君　おえー、くさっー。（その場から遠ざかる）たまらんです。

ようこ　はあ？　なんっあの人、いきなり失礼やね。

こずえ　まぁまぁ、彼はちょっとね、個性的やけさ。

ようこ　そういう問題やないやろう、普通お客さんに対して臭いとか言うかね。

こずえ　いや、そういう意味で言ったんやないと思うよ。

ようこ　そういう意味やないっち、どういう意味ね。

生田は再び、ようこに近づき。

いっ君　おえー、（鼻をつまみ、ようこの周りをうろうろとする）
ようこ　ちょっと、なんねこの人。
こずえ　こらっいっ君、そんな事しちゃダメでしょ。
いっ君　たまりません。
ようこ　こずえ、あんた一体どういうつもりで、この人雇っとんね。
こずえ　いや、だけんそれは、（動き回る生田に）ちょっといっ君っ。
ようこ　うっとうしいわね、ハエみたいにっ。
いっ君　（楽しくなって）ブゥー、ハエはウンコの周りを飛びます。ウンコは臭いますのでハエは喜びます。
ようこ　ちょっとちょっと、こずえっ、どうにかしなさいよこの人っ。
こずえ　いっ君っ、ちょっともう、生田つよし！

生田、カウンターの方へ行く。

こずえ　（ため息）
ようこ　あんた、あんな人はやく辞めさせなさいよ。
こずえ　彼は嫌がらせとかそんなんで臭いっち言った訳やなくてさ、ほらお母さんのその香水の匂いがね。
ようこ　香水がなんよ。
こずえ　ほら（ようこを嗅いで）ちょっと着けすぎたんやないと？
ようこ　そんなことないわよ、いつも通りよ。大体あんたとあの人はどういう関係なんね、まさか、あんたと・・・。
こずえ　どういう関係っち、ただの従業員っちゃっ。
ようこ　だけんっ―
こずえ　（ようこの言葉を遮り）いやだけん利用者さんなの、もとね。
ようこ　利用者さん？　・・・もうどういう流れで一緒に働きよるかは知らんけど、お母さんはあんな非常識なバカみたいな人と一緒になるのは反対やけんね。
こずえ　バカとか言わんでっちゃ、それに一緒になるとかやないけ。

生田は静かに事務所に消える。

ようこ　あんた親がバカにされとるのに、他人を庇うんね。
こずえ　だけ、そうやないっちゃ。
ようこ　（桜の木に向かって）おとうさん、私達が手塩にかけて育てたこずえは、すっかり東京に汚されてしまいました。こんな事なら、高いお金を払って、仕送りをしてまで東京の大学とかに行かせんやったらよかったです。そうしたら家族水入らずで幸せに暮らせ

たのに・・・。やっぱり家族は一緒が一番です。私はこれから一人でどうやって生きて行けばいいんですか、お父さん。（鼻をすすり）

こずえ　ちょっとお母さん、ごめんね私が悪かったけ、ね。もう泣かんで・・・。（鼻をすする）

生田がえみに絆創膏を手渡して何かを伝え、そしてまた事務所へ消える。

えみ　え、なに、絆創膏？

えみ、絆創膏をこずえに差し出す。

えみ　はいこれ、いっ君が、それと「忘れない限りなくなりません」って、お母さんに・・・。

こずえは絆創膏を受け取り、事務所にいる生田を気にするも、母を気づかう。

こずえ　お母さん・・・。

暗転

3場

前場から3日後の月曜日。
暗転の中、生田の歌声が聞こえてくる。
ミュージカル、モーツァルトの（何故愛せないの？）を歌っている。

明転

生田は店内に作られた簡易的なステージで歌い続ける。
その周りをなんとなく囲むように、服部、石原、五十嵐がいて、カウンター席には、こずえ、上沼、が座ってい

る。少し離れた所に、岩崎がいる。

服部　こずえさんゴメンなさいね、なんか無茶なお願い聞いてもらっちゃって。

こずえ　いいえ、そんな無茶だなんてことは、むしろいっ君も嬉しそうだし。

えみ　店、暇だしね。

服部　どうしてもいっ君のところに行って、歌の練習するんだって聞かなくて。

こずえ　さとちゃんは、本当にいっ君のことが大好きですね昔から。

服部　そうなのよ、だからいっ君が施設を出てから半年間、ずっと元気がなくて。

こずえ　そうですか。

服部　それでどこで聞きつけたのか、こずえさんの喫茶店に居るって知ってからは、いっ君と一緒に歌の練習するんだって聞かなくて、それで・・・。

えみ　何で歌の練習なんですか？

服部　ほら、うち複合施設でしょう、だから別棟にはお年寄りもいて、事ある毎に歌を歌いに行って盛り上げてくれてたのよ。

えみ　ふーん、それで。

こずえ　まあ、本人たちは盛り上げていると言うよりは、ただ歌を歌いたいだけなんだろうけど。

服部　それでも歌う方も、それを聴く方も楽しそうだから。それに少なからず、いろんな人に関わる事で理解が広がればと思うし、彼らの世界も広がるだろうし。

こずえ　そうですね。

生田が歌い終わり、一同拍手。
こずえはＣＤデッキを止める。

石原　いっ君、ステキ。やっぱりいっ君の歌が一番よね。

五十嵐　ええ、まあ、それはそうですかね。でも私的には、さとみさんが一番ですがね。

いっ君　（喉を擦りながら）久しぶりの練習なのでピリピリします。

石原　いっ君、大丈夫？

五十嵐　彼も大人の男ですからそれくらいは―。

石原　五十嵐、飲み物。

五十嵐　はい、只今。

五十嵐はウロウロしつつ岩崎の所へ行く。

石原　五十嵐、早く。

五十嵐は目の前のコーヒーカップを手に取り石原へ渡す。

岩崎　・・・。
石原　はい、いっ君。（コーヒーカップを渡す）
こずえ　あ、ちょっとそれ。

生田はコーヒーを口に含むがカップに戻す。

いっ君　おえー。（カップを石原に返す）
石原　いっ君大丈夫？　（カップを五十嵐に返す）

五十嵐はカップを岩崎へ返す。

えみ　どうしたの？
こずえ　いっ君コーヒー飲めないのに。
服部　あらら、喫茶店の店員なのに。
こずえ　ほらいっ君、こっちでうがいを。

生田はトイレへ入る。

こずえ　トイレでうがいしなくてもいいのにね。
石原　いっ君、大丈夫？
こずえ　大丈夫よ。みんな喉乾いたでしょう、少し休憩したら。

こずえはカウンターに入り仕事をする。
石原はトイレの近くで生田を待つ。
五十嵐は岩崎のところに居る。

五十嵐　エロ動画見せて下さいな。
岩崎　・・・・。
えみ　みんな自由ですね。
服部　まあ、いつもこんな感じよ。
えみ　歌は個人個人で歌って、合唱とかは歌わないんですか？
服部　見ての通り、みんなで一つの事に取り組むってのが、彼らにはなかなか難しくて。だから歌いたい人が、歌いたい曲を歌うって事にしてるの。

えみ　なるほど、・・・で、いっ君のさっきの歌って、何の歌なの。
こずえ　私もちゃんとしたやつを聴いたことがないんだけど、ミュージカルの歌らしいわよ。
えみ　へえ、ミュージカルが好きなんだ。
こずえ　好きと言うか、いっ君が昔、お母さんと一緒に観に行った最初で最後のミュージカルだったのよ。
えみ　最初で最後？
こずえ　そう。（飲み物を持って行く）
えみ　いっ君のお母さんって、亡くなっちゃったんですか？
服部　いや、そうじゃないんだけど。いっ君は小さい頃から、お母さん一人で育ててもらってて。ほらまあ、それぞれいろいろと家庭の事情があるでしょう。
えみ　ああ、まあ。
服部　でも正直、障害のある子供を女手一つで育てるのって、ものすごく大変なのよ、体力的にも金銭的にも。それに周りの理解がないとなかなかね。それである時、やっとの思いで再婚したのよ、いっ君のお母さん。その時はものすごく喜んでいてね、私達にこう言っていたの。「現れたんです、理解者が、私もつよしも一緒に面倒を見てくれるっていう奇特な人が」って、ところが喜びも束の間、その旦那、いっ君に暴力をふるうようになって・・・。
えみ　ひどい、何でそんな事を。
服部　それどころか、いっ君のお母さんにも。障害を持つ子と生活を共にするって事は、身内でも根気がいる事なのよ、たとえ夫婦になったとはいえね。相手が車椅子に乗ってたり、白杖棒を持ってたりして身体的障害があるんだと分かれば、対峙する側も心の準備がしやすいかもだけど、なまじっか、いっ君の障害は目には見えないからね。その旦那にとっていっ君は、想像以上に重荷だったのよ。だからって許されることではないけど。
えみ　・・・。
服部　挙句の果てにその旦那、やけを起こしたのか障害者年金にも手を付けだして、お母さんも必死にそれだけは阻止しようとしてたみたいなんだけど・・・、ノイローゼになっちゃったらしくて、もう連絡がとれないのよ。施設の人間としてはそれ以上は介入が難しくて、あとは行政にまかせるしか・・・。
えみ　そんな事が現実にあっていいの・・・。
こずえ　（戻って来て）彼らにとって親は最大の理解者で最後の砦なのよ、それが崩れ去った時には、彼らの歩む道は・・・。
えみ　歩む道は？
服部　人間社会で生きる術を持たない彼らは、概ね飢えを凌ぐ為に、万引きなどの軽犯罪で刑務所かもしくは浮浪者、最悪は・・・。

えみ　じゃあヒーローって慕われるくらい正義感の強い、いっ君は・・・。
服部　刑務所に入るようなことはしないでしょうね、おそらく。
えみ　じゃあ・・・。
服部　ゴミに埋もれていたところを、でしょ。
こずえ　・・・。
えみ　あんたって人は、どこまで―。

トイレの流れる音がして、生田が出てくる。

石原　いっ君、長かったね、大丈夫？
いっ君　うんちが出ただけ。
石原　えぇ、血が出たの、大丈夫？
いっ君　（植物の前に座り込み）紹介します、せいちゃんです。
石原　せいちゃん？
いっ君　あちらの、岩崎せいとさんから頂きましたから、せいちゃんです。
石原　え、頂いたの、何を？

岩崎はコーヒーカップを持ってカウンターへ。

岩崎　あの、これ。
こずえ　あ、おかわりですか？
岩崎　ええ、まあ。生田君がさっき・・・。
こずえ　あ、そうですよねすみません、すぐ淹れなおしますので。
岩崎　すみません。ちょっとトイレに。（トイレに入る前に植物を一瞥して）
服部　あの人常連さん？
こずえ　はい、とってもいい人で。
えみ　唯一のね、でも何か独特よね。
服部　そうなの。
えみ　はい、どことなく。それに私がここに来た時は百パー居ますし。
服部　へー、もしかして、えみさん目当てなんじゃない。
えみ　やっぱりそう思いますぅ、くにこさんも。
服部　え、ああ、うん。
えみ　ねぇこずえ、あの人って何してる人なの？
こずえ　え、何って？
えみ　だから仕事よ、だってしょっちゅう此処に来てるんでしょう。
こずえ　まあ来てるけど、仕事の事なんて私は知らないわよ。あ、でも確か、フレックス出勤だから時間にはゆとりがあるとか言ってたかな。
えみ　てことは、俗に言うホワイトカラーって事かしら。

服部　まあ見た感じでは、肉体労働者って雰囲気ではないわねぇ。
えみ　いつもここに来てパソコンいじってるんでしょ？　て言うことは、ＩＴ関係の仕事かしら。もしかしてベンチャー企業の社長だったりして。
服部　ずいぶん飛躍するのね。
こずえ　でも、えみのタイプではなさそうだよね。
えみ　まあ韓流って感じではないけど、この際見た目は二の次でしょうここまでくれれば。ハイスペックはそれらを補ってくれるのよ。

トイレの流れる音。
岩崎はトイレから出て来て、えみの視線を感じる。

岩崎　・・・あ、どうも。
えみ　こんにちは。
一同　・・・。
こずえ　あ、岩崎さんコーヒーすぐお持ちしますので。
岩崎　あ、はい。（席に戻る）

独りで動き回っていた五十嵐も岩崎の前の席に座り、
リュックからピコピコハンマーを取り出し。

五十嵐　あなた、私に勝てますか？
岩崎　え？
五十嵐　い、いざっ。
岩崎　いざ？
五十嵐　最初は、最初は、（ジャンケンの構えをして）んん、最初っからっ。

岩崎はかけ声につられてグーを出す。
五十嵐はパーを出す。

岩崎　あ。

五十嵐はピコピコハンマーで岩崎の頭を叩く。

岩崎　いたっ。
五十嵐　参ったか。
岩崎　あはは、はい。
五十嵐　ヘラヘラするな。（叩く）
岩崎　いた。
五十嵐　口ほどにもない奴め、それで愛するものを救えるとでも思ってい

るのかっ。

岩崎　え、いやー、まあ。

五十嵐　私がそのねじれた根性を叩き直してくれるわ。（何度も叩く）

岩崎　いたっ、いたっ、いたっ。

えみは化粧直しで手持ち鏡に夢中。
一同は五十嵐と岩崎の方に気づき。

服部　あらら。

こずえ　（コーヒーを持って行きながら）こらこら、五十嵐さんっ。すみません岩崎さん。

岩崎　あ、いや、いいんです、ちょっと遊んでいただけですから。

こずえ　そうですか、それならいいんですけど。

五十嵐は岩崎を叩く。

こずえ　あ、ちょっと。

五十嵐　遊んでいるだけですから。

岩崎は、こずえに笑みを返し。

こずえ　（コーヒーを置き）それじゃあ、ごゆっくりどうぞ。

岩崎　はい。いたっ。

生田と石原も加わって。

いっ君　ちょっと五十嵐君、僕たちにもやらせて下さい。

五十嵐　あの、生田君は私の事を五十嵐君と言いますが、そもそも私の方が生田君より年上なので、常識的には君ではなくて、さんと呼ぶべきではないかと思いますが。

石原　かして五十嵐。

五十嵐　はい。（素直に譲る）

岩崎はその遣り取りをじっと見ている。

服部　岩崎さんだっけ？　いい人みたいねぇ。

こずえ　ええそうなんですよ。彼らに対して寛容で理解してくれてるみたいだし、それにいつもお花とかを持って来てくれるんですよ、店内にあるのは殆んど岩崎さんが。

えみ　ハイスペックで性格よし。

服部　あの人なら、いっ君の面倒を見てくれたりして。
こずえ　え？
服部　分からないわよ。分からないけどもしそうなったらいいのになって少し思っただけ、個人的にね・・・。
こずえ　あぁ・・・。
えみ　何だか思い遣りのくにこさんが、マリア様に見えてきた。
服部　え、マリア様？　マリア様って聖母マリアのこと？
えみ　はい。
服部　やだやめてよ、私はただ（生田らを見ながら）他人事ではないから、どうすれば幸せに暮らして行けるかを考えただけの事よ。
えみ　職業柄って事ですか？
服部　と言うより、私も発達障害者だからね（笑）。
えみ　え？　あはは。

石原と生田が席に座り、ジャンケンをする。

いっ君　ジャンケン、ジャンケン（石原も楽しそうに）ジャンケンっ、パー。
石原　（遅れて）グー。

生田はハンマーで石原を叩く寸前、五十嵐が石原の前に頭を出す。
生田は構わずに五十嵐を叩く。

いっ君　ジャンケンっ、パー。
石原　（遅れて）グー。

先程と同じく、生田は五十嵐を叩く。
これを何度か繰り返す。
えみは、おもむろに時間を確認して。

えみ　あらいけない、もうこんな時間、私行かなくちゃ。
こずえ　どこに？
えみ　どこにって、仕事に決まってるでしょう。
服部　あら、今から。
えみ　そうなんですよ、これから打ち合わせが。なのでくにこさん、今日はこれで失礼します。
服部　ええまた、お仕事いってらっしゃい。
えみ　はい、それじゃねこずえ、また来るわ。
こずえ　うん。

えみはお金をテーブルに置いて。

こずえ　ああ。
えみ　お釣りはいいわ。（出口へ向かい）じゃあ皆またね。

生田達はそれぞれえみにバイバイする。
えみは岩崎に会釈して店をでる。

服部　さてと、私もそろそろ戻らないと。
こずえ　え、くにこさんも行くんですか？
服部　行くんですかって、私もいま勤務中なんですけど、これでも。
こずえ　ですよね。
服部　まあまた様子を見に来るから。
こずえ　はい、そうしてもらえると、いっ君も喜びます。
服部　・・・こずえさん。
こずえ　はい？
服部　今、しあわせ？
こずえ　え？
服部　余計なことかもしれないけど、人にはそれぞれ出来る事と出来ない事があるでしょう。
こずえ　・・・。
服部　どんなに良い事でも、どれだけ正しい事だとしても、分相応というか・・・、身の丈以上の事は人ひとりの力ではどうにもならない事もあるのよ。
こずえ　・・・。
服部　だからって、まあ簡単に切り捨てられない事もあるかもしれないけど、まずは自分の人生が一番だからね。自分を大事にして、一人で出来ない事は仲間に頼るってのもありなんじゃないかしらってね。
こずえ　・・・くにこさん。
服部　何もしてない私が偉そうにごめんなさいね。とにかく私は、こずえさんの戦友だから、何かあれば話してね。私に出きることなら力になるわよ、頼りないかもしれないけど。少なくとも一緒に考えることくらいは出来るわよ私でも。
こずえ　・・・はい、ありがとうございます、くにこさん。
服部　うん。二人ともそろそろ帰るわよ、ほーら自分の荷物は自分で持つ。

石原は逃げるように生田にしがみ付く。

五十嵐は岩崎にしがみ付く。

服部　ほら、言うことを聞かない人はもう此処には連れて来ませんよ、いいんですか？

いっ君　いやです。

石原　いやです。

五十嵐　いやです。

服部　じゃあ帰る支度をして下さーい。

三人　はーい。

石原は自分の荷物を持つ。
五十嵐は（ドゥクドゥン、ドゥクドゥン）と言って動き回っている。
生田も自分の荷物を取りに行く。

こずえ　いっ君は何も持たなくていいでしょう。

いっ君　何も持たなくていいです。

服部　はーい、準備が出来た人から手を繋いで下さい。

生田が一番に服部の手を繋ぐ。
それに続いて石原が生田の手を繋ぐ。

こずえ　いっ君は違うでしょう、こっち。

いっ君　はい。

石原　いっ君はこっち。

いっ君　はい。

服部　あらら、女の戦い。

こずえ　もう、くにこさん、からかわないで下さい。

五十嵐　ドゥクドゥン、ドゥクドゥン（動き回っている）

服部　五十嵐君、電車には乗らないよ、バスで帰るんだから。

五十嵐　服部さん、服部さん、あの電車には乗らないのですか？　私はどちらかと言うと、バスより電車の方をお勧めしますが、どうしますか？

服部　お勧めしてもバスで帰ります。

五十嵐はガッカリして手を繋ぐ。

服部　それじゃね、いっ君また。

いっ君　また。

石原　いっ君も一緒に行く。

服部　さとちゃん、いっ君は行かないのよ。
石原　いやだ。
服部　また次、来た時に会えるからいいでしょう。
こずえ　さとちゃん、また来てね。
石原　うん、来るよ。（生田の手を離さない）

こずえと服部は顔を見合わせて。

こずえ　それじゃいっ君、そこのバス停までお見送りしてあげて。
いっ君　はーい。
石原　はーい。
服部　ごめんなさいね、こずえさん。
こずえ　よっぽど嬉しかったみたいですね、さとちゃん。
服部　ほんとに、今生の別れじゃあるまいしねぇ。それじゃいっ君、バス停までお願いします。
いっ君　出発進行。
石原　出発進行。

二人仲良く手を繋いで店を出る。

服部　じゃあね、こずえさん、また。
こずえ　はい、気をつけて。
五十嵐　ドゥクドゥン、ドゥクドゥン。

二人手を繋いで店を出る。

こずえ　ふぅー、（岩崎に）あ、本当にいつも騒がしくてすみません。
岩崎　いいえ。

間

岩崎　あのー。
こずえ　はい、あ、おかわりですか？
岩崎　あいえ、そうじゃなくて、考えてもらえましたか、あの、手伝いのー。

ドア鈴が鳴り、ようこが入って来る。

こずえ　いらっしゃいませ、あ。
ようこ　（カウンターの方へ行きながら）あら、えらい荒れとうわね。

こずえ　うん、ちょっとね。それよりお母さんどうしたと？
ようこ　どうしたとっち、あんた、親が子供に会うのに理由がいるかね。
こずえ　いやそうやけど。
ようこ　ちょっと水くらい出しなさいよ。
こずえ　あ、うん。
ようこ　（木の方を見て）あら、もうここも咲きようね。
こずえ　うん、そうなんよ。
ようこ　咲き始めたら早いけねぇ、散るまであっという間よ。
こずえ　はいお水。
ようこ　ありがとう。
こずえ　それより大丈夫なん？　四日間も東京におってから。
ようこ　大丈夫っち何がね。
こずえ　だけ、お店よ。
ようこ　大丈夫よ、ただ一泊延ばしただけやないね。それに早く帰ったところで、誰かがお母さんを待っとる訳やないし。
こずえ　お客さんが待っとるかもしれんやん。
ようこ　お客さんは、お客さんやろうもん。
こずえ　・・・。
ようこ　ほんとあんたは、親の心子知らずやけ。
こずえ　・・・それで。
ようこ　それでやないやろう、帰る前にこずえの顔を見てから帰ろうっち思ったんやないね。
こずえ　うん。

ようこ、水を飲み干して。

ようこ　さてと、それじゃ帰ろうかね、誰もいない我が家に。
こずえ　もう、帰ると？
ようこ　言ったやろ、ただ顔を見に来たっち。
こずえ　うん。
ようこ　よっこいしょっと、それじゃあね。
こずえ　そこまで送るよ。
岩崎　いい、いい、それにお店どうするんね。
こずえ　・・・。
岩崎　あの、よかったら自分、留守番しておきましょうか。
こずえ　え。
ようこ　ついでにそこら辺も片づけておきますので、どうぞ。
こずえ　・・・本当、いつもありがとうございます。ほらお母さん行くよ。
ようこ　ほんと、すいません。（戸を開けて）あら、何かひと雨きそうよ。

ようこ、店を出る。
生田が入れ違いに帰ってくる。

いっ君　いらっしゃいました。
こずえ　あいっ君、ちょっとお母さんをそこまで送ってくるから、テーブルとかいつも通りにしておいて、お願いね。

こずえ、店を出る。

いっ君　お母さんは大切にして下さい。お母さんは大切です。お母さんは家族ですから。家族は大事です。大事です。・・・僕は家族ではありません。
岩崎　じゃあ一緒に片づけようか。

二人はそれぞれ片づけをするが、いつの間にか生田が岩崎をこき使う容になっている。
生田は座って水を飲みながら。

いっ君　うん、まあこんなもんかな。ちょっと岩崎君もこっちで一服したらどうですか。
岩崎　はい・・・。
いっ君　まあね、あの、どんな仕事もね、楽なものはありませんので、ええ。

二人はテーブルの上のピコピコハンマーに気が付き。

いっ君　五十嵐君の忘れ物ですよ、これは。
岩崎　そうだね。
いっ君　持って行きますか？
岩崎　え、今からっ。
いっ君　・・・最初っからっ。

岩崎は咄嗟にグーを出す。
生田はパーを出し、ピコピコハンマーで岩崎を叩く。

いっ君　あいこでしょっ。（パーを出す）

岩崎はチョキを出す。
生田がハンマーを取ろうとするが、岩崎が先にハンマーを取り、生田を叩く。

いっ君　・・・あいこでしょ。（パーを出す）

岩崎がチョキで勝ち、生田をハンマーで叩く。
これを何度も繰り返し、次第にエスカレートしていく。
もはや生田は沈黙しているが、岩崎は止めない。

岩崎　しょっ（と言いながら生田を何度も叩き続け）大体、何で、お前みたいな、バカが、広居さんと、毎日、一緒に、働いてん、だよっ！。お前みたいなっ、どうしようもないバカはっ、どうせっ、親にもっ、捨てられたんだろっ！

息を切らしながら更に。

岩崎　広居さんは、お前の、親でも、家族でも、何でもない、赤の、他人なんだよっ！　お前みたいな、バカな奴のせいで、周りの人間も、広居さんも、迷惑してるんだよっ！

いっ君　・・・もう、やめてください。

岩崎は止めない。

岩崎　一人じゃ何もできない、頭の悪い、障害者がっ。お前みたいな奴が、居なくなれば、すべて、丸く収まるんだよっ！

いっ君　・・・もう、いいです。

岩崎　消えてしまえっ、消えてしまえっ、消えてしまえっ・・・・・・

いつの間にか外は激しく、大粒の雨が降っていて、雷が轟いている。
生田は胸を押さえて苦しみだすが、岩崎は叩くのを止めない。
そして、うずくまった生田のウエストポーチを漁り、盗聴器を取り出す。
ドア鈴が鳴り、山本しんやが入って来る。
岩崎は何事もないように店を出て行く。
山本しんやが何気なく椅子に座ろうとした時、床でうずくまっている生田を発見する。

山本　生田君？　おい、生田君大丈夫か。おい、生田君しっかりしろっ、おい、生田君っ！

こずえが帰って来て、倒れている生田に気が付き。
暗転。

4場

前場から数時間後。
山本はテーブルに座っている。
こずえが飲み物を持って行き。

こずえ　はい。（テーブルに置く）
山本　ありがとう。（一口飲んで）どう、様子は？
こずえ　うん、薬が効いているみたい、今は落ち着いて眠ってる。
山本　そう、・・・よくあるのこういう事。
こずえ　ううん。実は、私が路上でいっ君を発見した時も胸を押さえて苦しんでいたの、それで救急車を呼んで病院に搬送してもらって・・・、その時以来。
山本　そう・・・。
こずえ　お医者さんの言うには、いっ君は心疾患もありますねって。それでいつまた発作が起こるか分からないからって、薬はいつもウエストポーチに入れて持ち歩かせてるのよ。
山本　そう、そんな事が。それでなくても彼らは普通よりも体力的に弱い傾向があるっていうのに。
こずえ　うん、でもここに来てからは元気でずっと何事もなかったのに、何でまた急に・・・。

間

こずえ　しんや君、話って？
山本　ああ、実は最近またうちの職員さんが辞めてしまって、それで今ちょっと人手不足で。
こずえ　そうなんだ。
山本　うん、それにジョアンさんも国に帰らせて下さいって言っていて。
こずえ　え、ジョアンさんも。日本語も覚えて国家資格まで取って、国に残している家族のためにって、一生懸命やっていたのに？
山本　ああ、結局人手不足のしわ寄せが生真面目な人のところにいってしまって。

こずえ　ジョアンさん、人一倍まじめで責任感が強いもんね。
山本　うん。・・・それで君に戻って来てもらえないかと思って。
こずえ　え。
山本　もちろん職員の募集はかけてる、だからってすぐにどうこうなる訳でもないし、それにいくら資格を持った人間が入って来ようがお互いが打ち解けるまで時間もかかる。大体資格なんてものは国が決めた単なる水準にすぎない、人間はそんな単純なものじゃないだろう。だから君なら施設の人間も利用者さんも顔見知りだし、それに何よりうちの職員さん達も、そして僕も君に戻って来てもらうことを願っているんだよ。

こずえ　・・・。
山本　どうだろう、君が戻って来てくれたら、きっとジョアンさんも残ってくれるに違いないし、服部さんも大歓迎してくれる。施設内で働いてくれる職員さん達が元気で明るくなってくれれば、利用者さんも喜ぶに違いない。今うちに必要なのは、他人が認めた資格なんかじゃなくて、うちに元気や活気をもたらせてくれる君なんだよ、こずえ。君にはそういう魅力があるから。

こずえ　・・・しんや君は学生の頃から本当に変わらないね。
山本　え。
こずえ　真面目で一生懸命でブレない。皆はキャンパスライフで青春を謳歌しているのに、一人アルバイトに明け暮れて・・・。
山本　ああ。
こずえ　それもすべてが自分で福祉の仕事をするためだって聞いた時は、私は感心したのと同時に、なぜそこまで出来るのか不思議にも感じたの。まあ、その誠実なところに惹かれたんだけどね。

二人顔を見合わせ笑う。

こずえ　いまだに思うもの、お爺ちゃん子ってだけでこんなに頑張れるなんて、って。
山本　別にそれだけって訳じゃないよ。
こずえ　そうなの？
山本　うん、まあ爺ちゃんがきっかけではあるんだけど、うちの家族の事だから別に細かく言う必要はないと思って。
こずえ　家族の事？
山本　うん、僕が子供の頃の事だから、今となれば別に秘めておく様な事じゃないのかもしれないけど。
こずえ　聞いても、いい？
山本　・・・うん。僕は爺ちゃん子で子供の頃はいつも爺ちゃんにくっ付いてまわってた。爺ちゃんも僕の事をしんちゃん、しんちゃん

こずえ　って可愛がってくれてて・・・。それで僕が中学生くらいの時から少しずつ爺ちゃん呆けだしてきて、初めは僕も家族も「爺ちゃんも歳だからしかたないね」って笑い話になってたんだけど、月日が経つにつれて症状がだんだん酷くなってきて、笑えなくなってきたんだよ皆。爺ちゃん僕の名前も忘れちゃって・・・。

山本　そうなんだ。

こずえ　でも仕方ないんだよ、こればっかりは。歳を取れば誰だって何らかの病気はするもんだから、ただうちの爺ちゃんはそれが認知症だったってだけで・・・。

山本　うん。

こずえ　それで、その爺ちゃんをどうするかってのが家族で問題になってね。誰が面倒を見るのかとか、じゃあ施設に入れるのかとか、費用はどうするとか、そう言う事で揉めて、そうこうしている間に当の本人の爺ちゃんは、食べ物を喉に詰まらせてあっけなく死んじゃったんだよ。

山本　・・・。

こずえ　この事で家族は何となくぎくしゃくして、でもどこかでホッとした様にも僕には見えて、結局みんなは爺ちゃんの事を考えるというより、我が身の事の方が大事なんじゃないかって子供ながらに感じてしまったんだ。爺ちゃん子だった僕にはこの現状が受け入れ難かった・・・。

山本　・・・。

こずえ　おそらく爺ちゃんは、自分のせいでこれ以上家族が壊れるのが嫌で、わざと死んだんじゃないかと思うんだ。少なくとも僕はそう感じたんだよ。爺ちゃん頭は呆けていても・・・感じ取る能力、心は失ってなかったんだって・・・。

山本　・・・。

こずえ　僕が今この仕事をしているのも、何だか爺ちゃんに導かれた気がして。きっと運命なんだよ、これが、僕の。

山本　そんな事が、私全然知らなかった・・・。

こずえ　知らなくて当たり前だよ、誰にも言ってなかったんだから。

山本　うん。

こずえ　だからって訳じゃないんだけど、僕に協力してくれないか、こずえ。

山本　うちに戻って来て一緒に働いてくれないか。

こずえ　でも、この店が・・・。

山本　閉めたらいい、それにあまりうまくいっている様にも見えないし。

こずえ　でも。

山本　こずえは本当に、ただこの店をやりたくてやっているのか？

こずえ　それは・・・。
山本　本当は、生田君のためにやってるんじゃないのか。行き場を無くした彼のために、この店をやっているんじゃないのか？
こずえ　・・・。
山本　大体、君にそこまでする責任があるのか？　・・・僕だって彼を突き放したくてやっている訳じゃない。でも僕一人の出来る事なんて高が知れている。いつまでも身を切ってまで彼一人を繋ぎ止めておくのはもう無理なんだよ。身寄りから見放されてしまった弱者は、今の社会ではどうにもならないんだよ、あとは行政や国に委ねるしかないんだよ。今僕に出きることは社会の仕組みに従って、自分を必要としている人に手を差し伸べる事なんだよ。
こずえ　分かるよ、分かるけど、じゃあこの店が無くなってしまったら、いっ君はどうなるの？
山本　それは彼が決めることだ。
こずえ　それが出来ないからあんな風になって。
山本　これが現実なんだよ。
こずえ　だったらまた、うちの施設に。
山本　それは、無理だ。今までも何とか、うちの施設でやり繰りして彼を看てきた。しかし障害者年金は彼の母親の再婚相手が使い込んでいるみたいで、うちにはもう何年も入金してもらえていないし、彼以外にもうちを必要としている人はまだ沢山いる。生田君一人を特別扱いし続ける訳にはいかないんだよ。

生田はいつの間にか出て来て話を聞いている。
二人は気付かぬまま話を続ける。

こずえ　・・・。
山本　君は立派だよ、思いつきの優しさだけでは赤の他人をここまで面倒はみられないよ。でもね、優しさだけでは救えない事もあるんだ。・・・本当の意味で君に覚悟はあるのか？
こずえ　覚悟？
山本　そうだよ。障害を抱える病気の彼を、このまま一生面倒を看ていく覚悟だよ。生活はもちろん医療費もかかってくるだろう、赤の他人の彼のために自分の人生を犠牲にしてまでやっていけるのか？　手に負えなくなったら、はいもう知らないなんて事は出来ないんだぞ。それに、もし君のお母さんだって病気をするかもしれないじゃないか、その時はどうする？
こずえ　お母さんが・・・。
山本　君がまとめて二人の面倒を看るのか、そんなの無理だろう。僕らは神様じゃないんだ、すべては救えない。中途半端な施しは返っ

て彼らを苦しめる事にもなりかねない。弱者を守るためにある社会も万能ではないんだよ、人間社会という弱肉強食の中で淘汰されていく人間がいるのも、今の現実なんだよ。

こずえ　（鼻をすすり）じゃあ、私はどうすればいいの、目の前で苦しんでいる人を見て知らん顔してろって言うの。

山本　苦しんでいるのは生田君だけじゃない。

こずえ　どうすればいいの・・・、ねえ、しんや君。ねえ、私は間違っているの・・・、私はどうすればいいの、ねえ、ねえ、おしえてよしんや君・・・。

山本は席を離れて。

山本　どうするかは君自身で決めればいい。僕も今自分に出来る事をする、ただそれだけだよ。

山本は店を出る。

こずえは一人、すすり泣いている。

そこへ、生田がやって来て。

いっ君　・・・こずえさん。

こずえ　（涙を拭い）いっ君、もう大丈夫なの？

いっ君　こずえさん、痛いですか、どこが痛いですか。（ウエストポーチを漁り）

こずえ　別にどこも痛くないわよ、それよりいっ君の方が大丈夫なの？

生田はこずえに絆創膏を貼ってあげる。

いっ君　ここですか、こっちもですか、心が痛いですか？　じゃちょっと診てあげますので脱いでください。

優しい空気の中、溶暗。

５場

次の日。

生田がいつも通りの開店準備をし終える。

いっ君　はい、キレイになりました。

生田はウエストポーチの時計をみる。
そして机に座りポーチの中身を机の上に出す。
この時、生田の中で皆の声がフラッシュバックし、それを受けて生田は揺れ動く。
落ち着きを取り戻した生田は、おもむろに目の前の薬を両手ですくい上げトイレに入る。
少ししてトイレの流れる音。またトイレの流れる音、そしてまた流れる音。
相変わらずトイレの調子はよくない。

ドア鈴が鳴り、こずえが入ってくる。

こずえ　いつも混雑してるんだからお役所は・・・。おはよう、あれ、いっ君？

こずえはトイレの方に行きかけるが、机の上の生田の私物に気が付き。

こずえ　ああ、もうまた置きっぱなしにしてる。

生田がトイレから出てくる。

いっ君　あ、こずえさん、おはようございます。
こずえ　いっ君、おはよう。ほらこれ、ちゃんと仕舞っとかないと捨てちゃうわよ。
いっ君　・・・。
こずえ　聞いてるの、いっ君。
いっ君　（机の物を仕舞いながら）大切ですので、こずえさん、が、困ります。
こずえ　え、私が困るんじゃなくて、捨てられて困るのはいっ君でしょう。
いっ君　僕は、馬鹿です、ので・・・。

店の電話が鳴る。

こずえ　はいはい。（電話の方へ）
いっ君　こずえさんを困らせませんので・・・。
こずえ　はいもしもし、「喫茶あなたの止まり木」です。もしもし、もしも

し、まただ・・・。

こずえは電話を切って、ふと鞄の中に入っていた手紙を手に取り、生田に視線を向ける。
ドア鈴が鳴り、えみが入って来る。

いっ君　いらっしゃいませっ。
えみ　いらっしゃいましたぁ。
こずえ　ああ、えみ。
えみ　なに、もうやってるんでしょう、お店。
こずえ　ああ、うん。
えみ　ああ、うんって、それがお客様を向い入れる格好ですかぁ。
こずえ　ああごめん、すぐ用意してくるから。（裏へ行く）
えみ　（生田に）ねぇ。
いっ君　お好きな席へどうぞ。
えみ　どうも。

えみ、カウンターへ座る。
生田もカウンターに入り。

いっ君　今日は何曜日ですか。
えみ　ん、えっと・・・。
いっ君　今日は火曜日です。
えみ　あ、そうね。
いっ君　火曜日は何の曲ですか。
えみ　えっ？
いっ君　火曜日は火曜日の曲です。火曜日の曲は「ピアノクラッシク、ディスク１、フェイバリットピアノ５７分１１秒です、はい。
えみ　はい。

生田がＣＤをセットする。
曲が流れる。

いっ君　ショパン、別れの曲。
えみ　ああね。

こずえが出てくる。

こずえ　えみコーヒーでよかった？
えみ　あ、うん。ねえ、いつもこうなのいっ君は。

こずえ　え、何が？
えみ　音楽かける時。
こずえ　あぁそうなの、曜日ごとにかける音楽が決まっていて、全部暗記しているの曲名も秒数も。
えみ　へぇー。
こずえ　それより今日はまた早いのね。
えみ　早いってあんた、この店にとってはそうかもしれないけど、世間ではもうすぐお昼よ。
こずえ　まあそうだけど。
えみ　私も次の打ち合わせまでちょっと時間が空いているからさ、少しでもこの「喫茶止まり木」の売り上げに貢献してあげようと思ったのよ。
こずえ　それはどうもご愛顧頂きまして、ありがとうございます。
えみ　どういたしまして。

生田は桜の木の下で飛び跳ねている。
二人は生田を見ている。

こずえ　最近はいつもああなの。
えみ　相変わらず元気ねぇ。
こずえ　・・・それがそうでもないのよ。
えみ　え？
こずえ　昨日ちょっと発作を起こして。
えみ　そうなの、何でまた。
こずえ　それが分からないの、とりあえず薬を飲んで症状は落ち着いたんだけど、またいつ発作が起こるか心配で・・・。
えみ　それでさっきボーっとしてたんだ、こずえ。
こずえ　え、それでって訳でもないんだけど、まあちょっと。
えみ　ちょっと？　ふーん、まあお店していると色々あるもんね、でしょ。
こずえ　・・・実は、ちょっと手紙が・・・。
えみ　手紙？

こずえはポケットから手紙を出し。

えみ　何またラブレター貰ったの、例のあの人？
こずえ　いや、それが(数枚ポケットから出し)誰からかわからなくて・・・。
えみ　分からないって、何よそれ。

ドア鈴が鳴り岩崎が入って来る。

生田は、いらっしゃいませと言いかけるが、事務所へ去る。
えみは岩崎に微笑み。

こずえ　いらっしゃいませ、・・・いっ君？
えみ　ちょっと見せて。（手紙を取る）
こずえ　あ。

こずえは岩崎の所へ行く。

こずえ　ご注文は？
岩崎　あ、コーヒーで。
こずえ　はい、ありがとうございます。
岩崎　あ、それと（花を1輪差出し）これどうぞ。
こずえ　岩崎さん、本当いつもありがとうございます。
岩崎　いいえ。

こずえ、花を受け取りカウンターへ戻る。

えみ　ねぇ、ちょっとこれ何よ。
こずえ　・・・うん。
えみ　うんじゃないでしょう、誰に貰ったのよ。
こずえ　わからない。
えみ　わからないって、あんたが貰ったんでしょう、直接。
こずえ　ううん、直接じゃなくて、家のポストに入ってたの。
えみ　え、でも切手貼ってないじゃない。
こずえ　そうなの。
えみ　そうなのって、あんたこれ・・・。

ドア鈴が鳴り、安田が入って来る。

こずえ　いらっしゃいませ。
安田　（後ろを振り返り）あれ？　（扉口で）どうしたんすか兄貴。
村岡　（オフで）兄貴って呼ぶなっつってんだろうが。
安田　あ、はいすいません、すいません。
村岡　（オフで）居るか？
安田　居るに決まってんじゃないすか、ここの責任者なんすから。
村岡　（オフで）お前だれに向かって口訊いてんだコラぁ。
安田　あ、はいすいません、すいません。

安田が店の中に入って来て、続いて村岡が（長瀬智也風のピチピチの半ズボン姿）で入ってくる。
皆は一度、村岡に視線を取られる。

安田　まだちょっと寒くねぇっすか、・・・それ。
村岡　（窓から外の桜を眺め、爽やかに）あ、桜、咲いてるね、やす君、ほら。
安田　あ、うん、そうっすね、まぁ春っすからね。
村岡　（店内の桜に目をやり）あっ、こっちも、ほらやす君。
安田　うん、そうっすね。
村岡　じゃあここに座ろうか。（桜の近くの席に座る）
安田　はい、つーか、何なんすか兄貴。
村岡　こらやす君、いつも通り、りゅうちゃんって呼んでよ。
安田　え、いつも通り？
村岡　ねっ。
安田　あ、はい。

そこに、こずえが来て。

こずえ　いらっしゃいませ、ご注文はお決まりでしょうか？
安田　あ、どうします兄貴、（村岡の視線を感じて）あ、りゅうちゃん。
村岡　じゃあコーヒーで。
安田　あ、自分もコーヒーで。
こずえ　はい、かしこまりました。
村岡　桜、いいですね。
こずえ　はい、外の桜はもう満開ですけど、この木は日当たりのせいでしょうか、見ての通りまだ三分咲きくらいですけど。
村岡　でも僕は個人的に咲き始めの方がすきです。
こずえ　そうですね、これはこれで私も好きです。
村岡　こういうのって、まさに「梢の春」ですよね。
こずえ　え？
村岡　枝の先に花が咲いている様子ですよ。
こずえ　ああ、そう言う事ですかビックリした、私の名前もこずえって言うもんですから、すみません学がなくて。
村岡　いいえ。こずえさんって言うんですか、それはステキなお名前ですね。
安田　・・・。

村岡が笑い、安田も追従笑いする。
こずえも笑い、三人で笑う。

こずえはカウンターへ戻り。

えみ　こずえ、この手紙もしかして、あの人？
こずえ　え、そんなはずないでしょう、だってあの人初対面よ。
えみ　はぁ？　あんた真面目にそれ言ってんの？
こずえ　え、なんで？
えみ　だってほら、あの人、葉っぱの。
こずえ　葉っぱ？
えみ　ほら、薬の売人の・・・。
こずえ　え、違うわよ、全然別の人じゃないほら。

えみは一度、村岡を見る。

えみ　ちょっとこの前と雰囲気が違うけど絶対あの人よ。葉っぱのやり過ぎで少し頭が変になってるんでしょうよ、だからこんな手紙も・・・。
こずえ　えみの考え過ぎだってそれは、ちょっとおかしいんじゃないえみ。
えみ　おかしいのはこんな手紙を書く奴でしょっ。
こずえ　まあそうだけど、でもあの人が書いたって証拠はないし。
えみ　じゃあ私が直接確かめてあげるわよ。（席を立つ）
こずえ　ちょっとえみ。

えみ、村岡の所へ行き。

えみ　あの。
安田　ああ。
えみ　いや、あなたじゃなくて、あなた。
安田　（えみを睨む）
村岡　はい？　僕に何か？
えみ　（手紙を机に置き）これあなたが書いたんですか？
安田　あ、請求書のこと？
えみ　はあ、何とぼけてんのあんた。
安田　（立ち上がり）何だテメェぶっ殺すぞ。
村岡　おいっ、やす。

安田はイラつきその場を離れ、岩崎の所へ行く。

村岡　ちょっと拝見させてもらいますよ。
えみ　どうぞ。

村岡は数枚の手紙に目を通す。

えみ　どうなんですか？
村岡　これを、僕がこずえさんに？
えみ　はい。
村岡　（笑う）
えみ　何が可笑しいんですか？
村岡　宛名も切手もない、どうやってこずえさんに届けるんですか、この手紙を。
えみ　でもポストに入ってたのよね、こずえ。
こずえ　うん。
村岡　それじゃぁ、僕がこの手紙を毎回こずえさん宅のポストに入れたと？
えみ　それを確かめるために、今直接聞いているんです。
村岡　はっきり言いますけど違います。自分はそんな陰湿な嫌がらせするような性分じゃないんで。
えみ　そうですか・・・、それじゃあ（安田を見る）
安田　はぁ、オレ？　知らねぇしそんなの、つうーか家も知らねぇしそもそも・・・、ちょっと見せてもらうよ。

安田は手紙を読み上げる。

安田　「今日もおつかれさま。」何、これだけ？（別の手紙を読む）「今日のスカート姿、とてもお似合いでした。」うわっ気色悪りぃ。「今日は夕方から突然の雷雨・・・」ってどうでもいいし。「あいつ、もういらなくない？」え、何、あいつって誰？　「ポンコツはスクラップへ」はっ、これ俺じゃねぇからね。「社会のゴミ」「役立たず」「足手まとい」「バカ」何これ、ただの悪口じゃん。（こずえに）あんたそんなに人に恨まれるような事したの、見かけによらないね。
えみ　この悪口、こずえにじゃないでしょう。
安田　え。
村岡　彼女には労いの言葉、一方の誹謗中傷は・・・。

生田が出て来て、一同の視線は生田へ。

いっ君　いらっしゃいませっ。（お腹を擦りながら）ちょっとゴロついてきましたので・・・。（トイレに入る）
安田　あいつ超嫌われてんじゃん。まあ仕方ねぇか、実際バカだし。直

接関わんなきゃ見てて笑えるけど、ここであいつと話してたらマジでイラつくし、鬱陶しいもんねぇ、（岩崎に）あんたもそう思うっしょ。

安田は岩崎に肩を回す。
岩崎はバランスを崩してよろける。
その拍子に岩崎の荷物がこぼれ出る。

安田　おっとっと、ああ。（こぼれた荷物を拾おうとする）
岩崎　（慌てて）大丈夫ですから・・・。
えみ　あれ？
安田　何だよ。
えみ　その封筒。
安田　あ、はい（手紙を返す）
えみ　いや、そっちの。

一同、岩崎の荷物に視線をやる。

安田　あれ、同じ柄じゃんその封筒。
岩崎　・・・そうですね。
安田　（封筒を拾い上げ）何これ、流行ってんの？
岩崎　ちょっと返して下さい。
安田　中身入ってんじゃん、これもしかしてラブレター？　ちょっと見せて。
岩崎　返して下さいっ。
安田　ちょっとくらいいいじゃん。
岩崎　駄目っ。

安田は中身を出そうとする。

岩崎　返せって言ってんだろう！
安田　ああ？　（岩崎を見る）

えみが安田の手からその手紙をスッと取り上げて中身を見る。

えみ　同じ。
岩崎　・・・。

トイレの流れる音。

安田　同じ？
村岡　ちょっと拝見しますよ。（えみの手から手紙を抜き取り）

生田がトイレから出てくる。

安田　何て書いてんすか、兄、りゅうちゃん。
村岡　「最近は虫が寄り付いているから心配です」
安田　は？　何の事、虫って何？
えみ　ちょっと黙って。
村岡　「でも一番の虫は、いつも君の隣にいる奴だけどね」
安田　虫？　隣？　（あたりを見回し、生田を見る）
村岡　「僕が害虫駆除してあげるからね」
えみ　・・・これ、どう言う事ですか。
村岡　俺たちは虫ですか。
安田　え、そう言う事？　じゃぁ駆除するって俺らを？　（岩崎に）
岩崎　それは、（生田を一瞥して）あれの事で。
安田　あ、あいつ。害虫って生田のこと。
いっ君　・・・。
えみ　この手紙、全部あなたが書いたんですか？
岩崎　・・・。
村岡　（立ち上がり）この手紙はあんたのだったね。（穏やかに）ほらちゃんと仕舞っときな。で、こっちの手紙はあんたのかい？
岩崎　・・・。
村岡　ん、もしもし。
岩崎　ぼ、僕のです。
村岡　あ、そう。じゃこっちも返しとくね、はいどうぞ。
えみ　こずえに、何であんな嫌がらせするんですか？
岩崎　嫌がらせなんてしてない。
えみ　嫌がらせじゃないですか、こんな酷い手紙を書いて。
岩崎　自分は、広居さんのためにやっているんだ。
えみ　何が？　これのどこが、こずえのためって言うの？
岩崎　彼女の事を想って、彼女を励ますためにやっているんだっ。
えみ　はぁ？　励ます？
岩崎　そうさ、僕は彼女が心配で、だから少しでも元気を出してもらおうと思って、プレゼントだってしているし、この店にだっていつも来ているし、何よりも彼女もそれを喜んでいるんだから何も問題ないじゃないか？
えみ　喜んでるって。ここに来てプレゼントするのは勝手だけど、そんな手紙を貰って喜んでいる訳ないでしょう。

岩崎　大体、この手紙のどこがいけないって言うんだよ。
村岡　確かにこの手紙の内容は、彼女への労いの言葉ばかり、悪口は彼女にじゃない。
岩崎　そうさっ。
村岡　しかし問題はそこじゃない。その手紙はすべて住所もなければ切手も貼っていない。要するに直接自宅まで行き自ら郵便受けに入れたという事。
岩崎　・・・。
安田　そうなんすか？
えみ　あんた何で家知ってんの？
岩崎　それは・・・。
えみ　後を、つけた？
安田　マジで、気色悪りぃな、あんた。
こずえ　あの、一つ聞いてもいいですか？　電話かけましたか？
えみ　電話？
こずえ　最近、無言電話が多くて、店にも、私の携帯にも。
えみ　携帯にも？　番号教えたの？
岩崎　いや、教えてないけど・・・。
こずえ　・・・心配だったから。
えみ　はぁ、店はともかく、何で番号知ってるのよ。
安田　そんなの、そこん家のゴミでも漁っとけば、個人情報の一つや二つはすぐに手に入るぜ、今どき。
えみ　そうなの。
いっ君　ゴミはだしたらダメ、ゴミは出してもいい。

一同、軽蔑の眼差しで岩崎を見る。

岩崎　な、何だよ、何だよその目は。お前らのその目はイボか、節穴かっ。そんな目してるから肝心なところを見過ごすんだよ。事の発端はあいつだろう、（生田を指し）あのバカがいるからいけないんだよ、あの役立たずのせいで広居さんが苦労するんじゃないか？
えみ　彼は関係ないでしょう。
岩崎　関係あるんだよっ！　何で彼女が一人で、あのバカの面倒見なきゃいけないんだよ。この店は障害者施設なのか、違うだろう！　他人の善意にぶら下がって自分では何もしないくせに。だから僕は彼女の事を想って、彼女の負担を無くしてやろうと思ってるのに、どいつもこいつも自分の都合で口を開きやがって。（えみに）えっ、大学時代からの友達が、あの役立たずのせいで困っているって言うのに、あんたは面白半分に、ただここで時間を持て余して。（村岡達に）あんたらはあんたらで、弱者から金を吸い上げて、酷い

安田　のはどっちなんだよ、この偽善者どもがっ！　周りがいつまで経っても知らん顔して、純粋な広居さんばっかりに負担がのしかかってるから、だから僕が何とかしてあげないといけない、僕しか広居さんを助けてあげられないんだ。だからまず、ろくに意思の疎通も出来なくて、社会の役にも立たないあいつを、不幸を作り出す事しか出来ないあいつを駆除してやるって言ってるんだよ。

えみ　はっはっおもしれぇ、じゃあ早くやれよ。

安田　何言ってんの、やっぱりあんたもバカね。そもそもいっ君は何も悪い事してないじゃない、淀んでるのは、障害をつくっているのはあんた達でしょうが。

えみ　じゃあお前ぇがあいつの世話してやれよ、一生。

岩崎　は？　何でそうなるのよ。

ほらね、口では立派なことを言うんだよ皆、弱い者には手を差し伸べましょうとか、理解しましょうとか。でも実際に我が身に振りかかってくれば知らん顔、他人なんてどうでもいいんだろっ、この偽善者がっ！

えみ　・・・。

岩崎　だから言ってるだろうさっきから、あいつのせいで皆が迷惑してるんだよ、みんな困ってるんだよ、あいつは不幸を撒き散らす事しか出来ないんだよ。お前達みんな卑怯者だから、助けてあげなきゃとか言いつつ、何もしないだろ？　だから僕が自ら汚れ仕事をしてやるって言ってるんだよ。

村岡はゆっくりと歩き出し。

村岡　殺虫剤がいるなぁ、おいやす。

安田　あ、はい？

村岡　ちょっと殺虫剤持って来い。

安田　殺虫剤すか。

村岡　おう、でっかい害虫がいるから駆除しないと（岩崎の肩を組んで）なあ。

岩崎　・・・。

えみ　あんた達、頭おかしいじゃない。

安田　（こずえに）ねえ、殺虫剤ある？

こずえ　・・・。

村岡　やす、そこちょっと行った処に交番あったろう、そこでお巡りさんに、頭のいかれた変態ががいるから連れてって下さいって言って来い。

安田　変態？

村岡　（岩崎の手を締め上げて）此処にな。

岩崎　あ痛ったた。
安田　了解っす。（店を出る）
岩崎　ちょっと何するんだよ、放せっ。
村岡　害虫を駆除するんだよ。
岩崎　害虫はあいつだろう。
村岡　金魚の糞みたいに人の後をつけまわしたり、他人のゴミを漁ったり、無言電話をかけたり、陰湿な手紙を何通も送りつけたりするストーカー野郎をまず先に駆除しないとなぁ。
岩崎　何言ってるんだ、それはすべて広居さんのために・・・。
えみ　あんたまだそんな事言ってるの。こずえのためじゃなくて、自分の欲望のためでしょうがっ。
岩崎　うるさい、偽善者は黙ってろっ、痛ててて。
村岡　大人しくしないと腕の骨おるぞ。
岩崎　・・・広居さん、あなたも言ってたじゃないか僕に、いつもありがとうございますって、岩崎さんは本当に優しい方ですねって。みんなが岩崎さんみたいだったらって、言ってたじゃないですか？
こずえ　それは・・・。
岩崎　僕はただ、あなたの笑顔が見たかっただけなんです、あなたの喜ぶ顔を見たかったんです。それなのに・・・、そいつのせいで、まるで生田つよしに生気を吸い取られていくように、疲れた顔になっていく広居さんを、僕は見たくなかったんです。広居さんのために、僕は広居さんの幸せの事を想って・・・。だから広居さんにとって障害にしかならない生田つよしは、もう消えてしまえばいいんだよ・・・。

生田は床で独り、うずくまっている。

こずえ　それは違います。いっ君は障害なんかじゃありません。もしそこに何かの障害があるのだとしたら、それは受け止める側にも問題があるんだと思います。みんな生きるために生まれて、みんな幸せになるために生まれて来たんですからっ。
岩崎　・・・。
えみ　（生田に気づき）いっ君？

ドア鈴が鳴り、安田が入って来る。
続いて警官も入って来る。

安田　殺虫剤連れてきましたぁ。
警官　え？　（皆に向き直り）どうも、またですか？

安田　また？
警官　あれ、いないじゃないですか？
安田　何が。
警官　ここの地主の、おじいさん。
安田　は？
警官　ここで揉め事って言ってたから。なんだ地主のおじいさんじゃないんだ、私はてっきりここのおじいさんが「この桜はワシの私的財産じゃから、誰が何と言おうと勝手に切ることはゆるさんっ」とか何とか言って怒鳴り散らしてるのかと思ったもんで。この桜もそうですけどね、裏にも何本かあるでしょう、それが一部、生活道路の妨げになってててね、しょっちゅう揉めるんですわ、それでてっきり今回もまたかと・・・。
安田　俺、爺なんて一言もいってねぇし。
警官　あ、そうだった、でどうしました？
えみ　お巡りさん、変態が（指を指して）あの人、ストーカーです。
警官　（村岡と岩崎を見て）ストーカー？　それは怖かったでしょう。
えみ　はい。
警官　世間では事件になるまで警察は動かないと思っているでしょうが本官は違いますから、我が身の進退より本物の正義、そして市民の安心と平和。安心してくださいお嬢さん。じゃあちょっと話を聞かせてもらいますので、行こうか。（村岡を掴んで）
村岡　（振り払って）俺じゃねえよ、ふざけんなっ。
警官　ふざけているのはあなたの方でしょうが、さあ行こうか。（村岡を掴む）
村岡　（振り払って）だから何で俺なんだよっ。
警官　誰が見てもこの中で変態はあなたでしょう・・・、違いますか？
村岡　違うっ、お前ら黙ってないで何とか言えよっ。
警官　分かった分かった、あなたは変態じゃない、うん。
村岡　うん、って何だよっ。
警官　ただ少しだけ話を聞かせてもらってもいいですかね。（岩崎にも）参考人として、あなたもご一緒願いますか？
岩崎　え、いや。
村岡　当たり前ぇだぁ。（力づくで岩崎も連れて行く）おいやす、証拠品。
安田　あ、はい、りゅうちゃん。（岩崎の荷物を持って）
村岡　テメぇ、誰に口訊いてんだよっ。
安田　え、だって兄貴がそう呼べって。
村岡　あーんっ？
安田　はい、すいません。

村岡、岩崎、安田、店を出る。

警官　それでは後の事はお任せ下さい。

警官も店を出る。

えみ　（ため息）とりあえずこれでよかったわよね、こずえ。

こずえ　いっ君？　いっ君、大丈夫っ？

胸を押さえて苦しむ生田。

えみ　どうしたの、いっ君。

こずえ　分からない、気が付いたら苦しんでて・・・。

えみ　え、何で、発作？

更に苦しむ生田。

こずえ　いっ君大丈夫？　薬、薬（生田のポーチを漁る）あれ、ないっ、何で・・・、何でないのよっ。

えみ　ちょっとこずえ、何してるのよ。

こずえ　無いのよ、薬がっ。いつもこのポーチの中に入れてるのにっ、薬が。

えみ　ええっ、何でそんな大事な薬なのに、ちゃんと数、確認しとかないのよっ。

こずえ　（生田からポーチをはずして中身を全部出す）昨日はまだあったのに・・・。

えみ　じゃあ何でないのよっ。

こずえ　そんなの私にも分からないわよっ。

えみ　裏はっ？　裏に置いてあるんじゃないのっ。

こずえ　裏っ？

えみ　ちょっと見てくる。（事務所の方へ行く）

こずえ　私も。（行きかける）

いっ君　こずえさん・・・。

こずえ　いっ君。

いっ君　こずえさん、聞いて、ください。

こずえ　何、いっ君、薬は、お薬は何処にあるの？

いっ君　お薬は、お薬は壊れたところを、治します。なので、のませて、のませて、あげました。

こずえ　え？　飲ませてあげた？

いっ君　これで、おトイレは、治ります。

こずえ　え、トイレ？

いっ君　おトイレがないと、みんな困ります。僕がいると、みんな困ります。

こずえ　何言ってるのか分からない。

いっ君　僕は、こずえさんの困った顔を見るのはウンザリですので、僕がいると、こずえさんは困りますので、お薬は、みんな、おトイレに、飲んでもらいました。

えみ　（入って来て）もお、どこにあるか分かんない。

こずえ　え、まさか、トイレに流したの？

えみ　え、・・・（トイレに行く）

いっ君　僕は、僕は、頭が悪いですので、家族でもないですので、僕とこずえさんは赤の他人ですので。僕はこずえさんを、困らせてしまいますので、困らせて・・・。

こずえ　何バカなこと言ってるの、人を、人を助けるのに理由なんていらないでしょう！

えみ　（オフで）あった、あったこれ、これ、いっ君の薬じゃないの、便器の脇に落ちてたっ。（出てくる）

生田はこずえの腕の中でぐったりとしている。

えみ　こずえ。

こずえは生田を抱えたまま、肩を震わせている。

こずえ　え。

えみ　いっ君、いっ君、もう、バカなんだから・・・。

こずえ

こずえは鼻をすすり、えみはその二人を前に呆然と立ち尽くす中・・・、暗点。

エピローグ

それから十日ほど経ち、店内の桜も散り始めている。
店は閉店しており、警官が一人考え深げに桜の木を眺めている。
そこへ安田が段ボール箱を抱えて出てくる。

安田　何で俺が手伝わねぇといけねぇんだよ大体。

警官　あ、先日はどうも。
安田　殺虫剤。
警官　いやぁ早いもんですねぇ、この前咲いたと思ったらもう散り始めてる・・・。
安田　・・・でも来年になったらまた咲くっしょ。
警官　そうですね、来年も再来年もその次の年もその次も。
安田　当たりめぇじゃん。
警官　ははそうですね、当たり前なんですよね、この桜の木にとっては・・・。一年に一回、花を咲かせるために生きている。ただそれも状況によっては障害になる場合がある。他人の目先の都合で、これを排除しようとする、そんな人達と戦っているんでしょうね、ここの家主のお爺さん。

間

警官　いやね実は私、最近上司に叱られましてね・・・。現場で上司の指示を仰いでたんですがね、目の前で事が進んでいるのを見ていると返答を待っているのがもどかしくてね、それで言ってやったんですよっ。事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだっ、て、心の中で・・・。それで自分の判断で動いたんですよ、そしたら（笑）。
安田　・・・。
警官　いや、その事案は問題なく解決しましたからご安心を。
安田　別に心配とかしてねぇし。
警官　私ね、自分の仕事に誇りと言うか、哲学を持っているんですよ。
安田　聞いてねぇし。
警官　（自分の制服を見せつけて）ほら、私、正義をまとっているんですよ、でもねこれは単なる見せかけです。本当の正義は（自分の胸に手を当て）此処にあるんです。だからたとえ上司に怒られようと私の正義は屈しません、安心してください。
安田　だから別に心配してねぇから。
警官　私のこの目は節穴ではありませんから、真実のみを見定めますので。
安田　いやこの前、兄貴と変態野郎を間違えてたじゃん。
警官　あれは誰がどう見たってあっちが変態でしょう、あんな恰好してるんだから。
安田　つーか何しに来たの殺虫剤。
警官　え、いや先日の件で報告を兼ねて、ここ閉店するって言うからちょっと顔出しに来ただけですよ、まぁもう帰るところですがね。
安田　さよなら。

警官　（出口へ）・・・あと殺虫剤じゃくて、せめてお巡りさんとかで、ね。

警官出て行く。
外から山本が入って来る。

山本　あ、安田さん、ありがとうございます。
安田　どうも、礼なら兄貴に言っといてよ。兄貴が行けって言うから仕方なくやってるだけだし俺は。
山本　はい。
安田　あの変態根暗野郎のこと、全部聞いたでしょう。
山本　ええ、まあ大体は。
安田　ほんと人は、何考えてんのか分かったもんじゃねぇよなあ。結局あいつ無職で、いい歳して親のすねかじりながら、こそこそ他人の生活覗いてんだぜぇ。
山本　うん。
安田　盗聴器なんか仕掛けたりしてよ、気色わりぃ。あの変態、善人のふりしてあれだろう？　誰が障害者だ、って話だよなぁ。
山本　そうですね・・・。
安田　へっ、別に良いんだよ俺は、誰が障害者だろうが健常者だろうが、まぁ世間から見れば、俺みたいのが障害なんだろうけどなぁ、はは。
山本　あ、はは。
安田　ただ兄貴は、こんなバカな俺でも面倒見てくれるんだよ。
山本　村岡さんでしたっけ。
安田　親すら俺を捨てるっていうのにょ。
山本　え、両親に？
安田　親も、世間にも。
山本　・・・。
安田　みんな俺をシカトしやがる、無かった事にしやがんだよ、無関心決め込んでやがんだよ。その時に俺思ったんだ、「俺、何のために生まれて来たんだろう」って、んで俺は死んだ・・・。
山本　・・・。
安田　生きてる意味ねぇなって。で自棄になって滅茶苦茶してたところに兄貴と逢って・・・、こんな俺の面倒見てくれたんだよ、俺の存在を認めてくれたんだよ、あの人が。
山本　・・・。
安田　それから俺は、兄貴に一生ついて行くって決めたんだ。
山本　そうですか。
安田　・・・あーあ、無駄口叩いちまった。ところで、あんたあの人の

山本　彼氏なんだってね。
安田　え、まあ。
山本　結婚すんの、あの人と、（荷物を持って）よいっしょっと、余計なお世話か。
・・・あ、（ドアを開けてあげる）どうぞ。

安田、出て行く。
服部とえみとこずえが事務所の方から現れて。

服部　ほぼほぼ片づいたわね。
こずえ　はい。
えみ　あとは、ゴミでいいんでしょう。
こずえ　うん、ありがとう助かった。今お茶入れるから少し休んでいって。
服部　いいわよそんなの、片づける物が増えるじゃない。
えみ　あ、しんや先輩、もうこっちは大体片づきましたので。
山本　あそう、お疲れ様。
服部　こずえさん、お母さんは？
こずえ　あれ、どこに行ったのかな、自分から手伝うって言っておいて。
山本　お母さんならトラックに乗ってるよ。
こずえ　ええ、もうお母さんったら、結局何しに来たんだか。
えみ　決まってんじゃん、（ボソリと）先輩に会いに来たんでしょうよ。
山本　僕が頼んだんだよ、駐禁とられないように乗っておいてくださいって。
服部　それなら、さとちゃん達が・・・。

石原と五十嵐が入って来る。

石原　いっ君、いっ君はおりませんかぁ～。
五十嵐　んー、んー。
服部　あらら、さとちゃん車で待ってるって約束したでしょう、だから連れて来てあげたのに、五十嵐君も。まあ、無理かぁ、はっはっは。

石原は事務所の方へ、五十嵐は店内を歩き回っている。

石原　いっ君、お歌の練習しますよ。（事務所へ入ってすぐ出てくる）いません。おトイレですかぁー、いっ君。
えみ　さとちゃん達って知らないんですか、いっ君のこと。
服部　うん、そうなの。
こずえ　・・・。

えみ　そっかぁ。
服部　（窓際に行き）ほらさとちゃん、こっち来てごらん。
石原　なに、いっ君いたの？

石原と五十嵐は窓から外を眺める。

えみ　ねえ、今もしかして、あいつとこずえのお母さん二人きりなんじゃない？　大丈夫かな、あいつ無神経だから。
こずえ　大丈夫でしょう。
山本　それじゃあ、自分がちょっと様子を見てくるよ。
えみ　ああ、いいですいいです、しんや先輩、私が行きますから。先輩はこの後も運転があるから、こっちで少し休んでいて下さい。

えみ、店を出て行く。
山本はカウンターの方へ近づく。
こずえは盆に人数分のコップをのせて、服部らに差し出す。
そして山本にもコップを差し出す。

山本　ありがとう。
こずえ　お母さん、いろいろうるさかったでしょう。
山本　君のことをいろいろと心配してたよ、まあ家族っていうものは、そう言うものなんだろうけど。
こずえ　うん。しんや君ごめんなさい、私、いまは・・・。
山本　実家に帰ってお母さんの店、手伝うんだろ。
こずえ　うん、何だかお母さんが気になっちゃって・・・。
石原　あの雲、りゅうみたい。
服部　あ、本当だ。
五十嵐　ドラゴンドラゴン、ドラゴンドラゴン。
石原　こっち見てる。
服部　ええ、見てるわね。
こずえ　結局、私、どれもこれも中途半端。人に頼ってばかりで何にも出来ない、この店もだし・・・、いっ君のことだって・・・。
山本　それは僕だって同じさ、僕に力があれば生田君を救えたかもしれない、こんな仕事をしていながら人ひとりも救えないんだから情けないよ。
こずえ　しんや君・・・。
山本　僕も爺ちゃんの事があって、正義感にかられてここまでやって来たけど、経済を優先する社会において、善意は時に非力で滑稽ですらある。ふとした瞬間その事を客観的に捉えた自分に襲ってく

こずえ　る、何とも言えない虚しさに心が引き裂かれそうにもなる。
しんや君は本当に偉いよ、立派です。私の目に狂いはなかった。
だから私も自分を信じて、今私にとって何をやるべきか、何が大
事かをしっかり見つめ直して、しんや君に嫌われないようにじっ
くりと考えてくる。だから、まず自分に出来る事をやる。
山本　うん、（立ち上がり）そりゃそうだ。そろそろ車に戻るよ、お母さ
んにも悪いし。服部さんっ、自分トラックに戻っておきますので。
（外へ出る）
服部　はい、わかりました。
石原　あたしも、お外に行く。
服部　お外？
こずえ　いいですよ、くにこさん。後は私だけでも十分ですので。
服部　そう、それじゃお散歩しようか。
石原　お散歩する。
五十嵐　オッサンオッサン、オッサンオッサン。

服部と石原と五十嵐も外へ出る。
こずえは三人を桜の近くで見送り。

こずえ　さてと。

えみと安田が入って来る。

えみ　こずえ、もう持って行く物ないの？
安田　何でまた、俺もついて来なきゃなんねんだよ。
えみ　あの観葉植物は。
こずえ　あれは、ここに置いて行く。
えみ　そう、それじゃ一応、もう一回裏見てくるね。ほらっ行くよ。
安田　ああ、だから何で俺が行かなきゃなんねんだよ。
えみ　頼まれたんでしょ、兄貴に。
安田　ったく。

えみと安田は事務所へ。

こずえ　（観葉植物を覗き込み）もう、ないよね。おーい、おーい、あは。
時々会話してたよね、いっ君。（しゃがみ込み）こんにちは、広居
こずえです。
えみ　（生田のマネをしながら）こずえさん、こずえさん。
こずえ　え？
えみ　こずえさん、こずえさん。

こずえ　もう、ビックリさせないでよぉ。
えみ　これはどうしますか、いっ君のじゃないですか？　（プルトップの入った瓶と銀の缶ケースを手に）
こずえ　プルトップ・・・、そうだった。いっ君が夜な夜な集めてたやつ・・・。
安田　（後ろから）そんなゴミ、缶と一緒に捨てちまえよ、持ってても仕方ねぇだろう。
えみ　確かに。でもこれってお金とかに替えられたり出来ないの？
こずえ　どうだろう。
えみ　まぁたいした価値はないかこんなの、（缶ケースを振って）でも結構あるわよ。
安田　あいつも、せこい趣味してるよな、そんなもん。
えみ　（何気なく缶の中身を見て）あれ、何か入ってる。
安田　だからプルトップだろ。
えみ　いや、これ。（中から手紙を出す）手紙？
こずえ　え、ちょっと見せて。
えみ　あ、はい。（手紙をこずえに渡す）
こずえ　（手紙を開いて）いっ君、字書くの苦手なのに・・・。
えみ　（手紙を覗き込み）うわ、古代文字みたい。
安田　ねぇ、何て書いてんの？
こずえ　（ゆっくりと手紙を読む）「ぼくわ、あたまがわるいです。ぼくわ、みんなにめいわくをします。ごめんなさい。」
安田　迷惑をするってなんだよ。
えみ　うるさい、ちょっと黙ってよ。
安田　ああ。
こずえ　「ぼくわ、こずえさんにわかんしゃしています。こずえさんわやさしいのでぼくわ、こずえさんといっしょにいるとしあわせです。とてもしあわせです。これからもずっとこずえさんといっしょにいたいです。でもぼくわ、こずえさんとわかぞくでわありませんのでだめかもしれません。」
えみ　いっ君って・・・、こずえの事を・・・。
こずえ　・・・「もしぼくがばかじゃなかったら・・・。もしぼくがもうすこしちゃんとしてたら・・・。もしぼくがふつうのひとだったら、かぞくになってくれますか。」
えみ　・・・え、何て？
こずえ　（涙を堪えきれず）「かぞくになってくれますか・・・。ぼくわこずえさんのことがすきです。これからもいっしょにいてほしいです。」
えみ　これって・・・。

こずえは涙で手紙が読めない。

えみは缶を置き、手紙を受け取る。

えみ　（続きを読む）「ぼくわこずえさんのいないせいかつわいやです。めいわくおかけないようにしますので、ぼくのかぞくになってください。」・・・ねえ、これって、いっ君からの・・・。

安田　ラブレター・・・。

こずえ　・・・。

えみ　違う、・・・プロポーズ。

安田　プロポーズ？

えみ　（読む）「これわかぞくのしるしです。」

こずえ　えっ？

えみ　「ちぎれてもいいようによびもあります。」

こずえは缶を開けて、中からプルトップに埋もれたネックレスを取り出す。

こずえ　（泣きながら）いっ君、いっ君。

安田　何それ？

えみ　プルトップの・・・、ネックレス。

こずえ　私、汚いって言っちゃった・・・、私、ゴミって言っちゃった・・・、いっ君、ごめん、いっ君、ごめんなさい・・・、いっ君・・・、ありがとう・・・。

店内に桜が舞い散る中

えみは、泣いているこずえを慰めている。
そして缶の中からもう一つの「プルトップのネックレス」を出してこずえの首にかけ、二人に笑顔がこぼれる
安田も缶の中を漁るが、バラバラのプルトップしか残っていない。

こずえ　（ネックレスを見つめながら、ぼそりと）彼は生きている・・・。

明りはゆっくりと落ちていき

声　「忘れられない限りなくなりません、あなたの記憶の中で・・・。」

桜の木にスポットがあたり、その下で生田が跳びはねている中・・・暗転。

幕